



Title	「地方進学校に通う生徒の学校生活と進路意識」に関する調査
Author(s)	浅川, 和幸
Citation	1-51
Issue Date	2012-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/90992">http://hdl.handle.net/2115/90992</a>
Type	report
File Information	2011_asakawa_kushiro.pdf



[Instructions for use](#)

# 報告書

---

## 「地方進学校に通う生徒の学校生活と進路意識」に関する調査

北海道大学大学院教育学研究院

准教授 浅川和幸

2012年3月

報告書

**「地方進学校に通う生徒の学校生活と進路意識」  
に関する調査**

北海道大学大学院教育学研究院

准教授 浅川 和 幸

2012年3月

## 《目次》

はじめに…… 1

調査概要…… 3

調査結果の報告…… 4

### 1. 進路意識…… 4

(1) 進路の概要

(2) 進学理由と学校選択で重視すること

(3) 学校選択の論理の射程——職業や価値志向との関係

(4) 進路選択で直面していること

(5) 小括

### 2. 学校生活…… 24

(1) 学校生活の類型とその特徴

(2) 学校生活の満足

(3) 小括

### 3. 生徒の特徴…… 29

(1) 自己意識

(2) 大人になるために必要なこと

(3) 友人関係

(4) 小括

### 4. 生徒は保護者をどうみているか…… 37

(1) 主に家計を担う家族構成員の職業

(2) 家族との関係

(3) 保護者の進路希望

### 5. 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(フリーアンサー)

の分析からみる高校生の「心のこり」…… 40

(1) 「第Ⅰ類型(勉強中心)」の特徴

(2) 「第Ⅱ類型(両立)」の特徴

(3) 「第Ⅲ類型(バランス)」の特徴

(4) 「第Ⅳ類型(勉強以外)」の特徴

(5) 小括

まとめ…… 45

資料1—学校生活類型のパターン分け

資料2—「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(フリーアンサー)

## はじめに

この研究を構想するに至った問題意識について簡単に述べておきたい。

近年、深刻度を増している日本経済の不況や地域間の経済格差は、若年層の雇用・就職環境の変化を激変させている。

高校生の学校生活や進路に、それは二つの影響を及ぼしている。第一に、直接的に高校生の家庭や保護者の経済的な状況を悪化させ進路選択を変えている。第二に生徒にとっての長期的な人生の見通し、すなわち若年層の就職状況の変化が彼ら／彼女らの進路の見通しや考え方に及ぼす変化である。そしてこれらの二つのことが、高校の進路指導に影響を及ぼす。

進路指導は、いわゆる高度成長期以降に定着したいわゆる「出口指導」からの変化が進められている。1990年代以降の「在り方生き方の進路指導」、そして2000年代中盤以降の「キャリア教育」の導入として行われてきた。特に、現行において教科指導とも一体となった「キャリア教育」は、高校教育にも大きな変化を及ぼしつつある。そこに貫いている原理は、第一に生徒を選択の主体化すること、第二に入学から卒業までを対象とする指導期間の全域化、そして第三に生徒の学習モチベーション低下に対応し、その喚起を狙いとした教科指導と一体となった指導の追求、である。しかしながら、この徹底の在り方は高校の位置によって違っている。例えば、生徒に高い学歴を取得させるために、「受験浪人」を許容することが可能な家庭の経済力が前提できる場合は、旧来的な進路指導でも対応可能かもしれない。しかし、確実にその可能性は減じつつある。

ところで北海道において、小泉政権のもとで行われた「行財政改革」の影響や「リーマンショック」以降の景気後退は、地域経済の疲弊を深刻化させている。大学進学率という観点からみて、従来でも日本の平均的な高校生の進路と本道の高校生のそれはかなり差があったが、北海道のなかでも地域格差の広がりを伴いつつ、高校生の進路実現を一層困難にしている。北海道の各主要都市の地方進学校においても、進路指導が従来のみでは、なかなか立ち行きたい事態が現れていると考えられる。

北海道立釧路湖陵高校（以降、「湖陵高校」と略する）は、道東地区の拠点校として高い進学実績をおさめていることは周知の事実である。平成15年から、それまでの進路指導の「改革」に着手した。単独で行っている統一学校説明会の実施や、平成20年度に北海道教育委員会から「地域医療を担う人づくりプロジェクト事業」として医進類型指定を受ける等の意欲的な進路指導を展開している。

2010年の11月に、湖陵高校進路指導部長（当時）である浅野泰弘先生からの聞き取り調査においても、計画的・継続的な進路指導を通して、「現役合格をかちとる」ことに重点を置いた指導の枠組みに展開させたことをうかがった。

その場での聞き取りをもとに、ひとまず湖陵高校の進路指導を、①教育費の家計負担を極力押さえるための「現役合格」を重視した進路指導、②大学における進路実績や卒業以降の進路実現を見越した形での大学選択を促す指導、③高校の三年間で学力を引き上げるための学習モチベーションの調達、④保護者に対する進路関係の情報提供と懇談の緻密な実施、として押さえておく。

これらの進路指導は、地域に責任をもつ進学校が考え抜いた一連の体系的なものであると理解できる。また日本社会において、高等教育への就学の地域格差や経済格差の影響が現れているが、高校においてそれに抗する非常に興味深い取り組みであり、北海道においてとりわけ重要な試みであると考えられる。

そこで、本研究においては、このような進路指導の変化のもとで、生徒たちがどのような進路意識を形成しているかを、課題とする。

生徒たちは、どのように進路指導の取り組みを受け止め、どのような展望をもって主体的に進路を選択し、進路を決定しているのだろうか。さらには高校生活の送り方や、高校生活の充実や楽しさと、主体的な進路選択とはどのような関係があるのか。これらのことを明らかにするのが、本研究の目的である。

なお本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤C）（研究課題「地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究」、研究代表者・浅川和幸、研究科第番号 22530904）によって行った。

## 調査概要

### 1. 調査の目的

地方進学校の高校生の進路意識を明らかにすることである。進路意識は、進路一般としてではなく、進学校という状況に対応し、また大学卒業後の職業生活を意識した大学選択を生徒に考えさせるというスタイルに対応し、就業を希望する職業との関連を重視する。さらに同様に、進路意識と関係する学校生活や家庭・保護者との関係、進路意識の基礎とする生き方に関する志向性や、自己意識の在り方、友人関係のあり方等の幅広い項目群との関係を明らかにすることから、進路意識にどのような特徴があるのかを明らかにする。

### 2. 調査方法

学校を通じてアンケート用紙を配布・改修する自記式質問紙調査。

### 3. 調査時期

2011年9月。

### 4. 調査対象

湖陵高校3年生（回収した230票中、有効回答は228票。有効回答率99.1%）。

※ ただし、調査票の記入に部分的に無回答（以下では、「N.A.」ノー・アンサーとする）があり、表中の計が228にならない場合もある。

### 5. 調査項目（付録「調査票」参照）

大項目は7点からなる。「基本的なこと」、「進路について」、「進路指導に関して」、「普段の生活について」、「友人関係について」、「将来について」、「あなた自身やあなたの家族について」、である。

### 6. 調査対象の基本属性

生徒の性別の内訳は、男子114名、女子113名、であった（不明が1名）。理数科所属40名、普通科理系所属生徒108名、普通科文系所属生徒80名である。

卒業後の進路希望は、進学が222名（97.4%）、就職が4名（2.2%）、その他1名（0.4%）、未定1名（0.4%）であった。以降では、主に進学希望者を対象として分析を行う。

## 調査結果の報告

### 1. 進路意識

#### (1) 進路の概要

学生の進学先を所属する文理のクラス別に集計したものが図表1である。

図表1 文系・理系の区別と進学先のクロス表

		進学先						合計
		四年制国 公立大学	四年制私 立大学	六年生国 公立大学	六年生私 立大学	専門・各 種学校	未定	
文系	度数(N)	64	15	0	0	2	0	81
	内訳(%)	79.0%	18.5%	0.0%	0.0%	2.5%	0.0%	100.0%
理系	度数(N)	104	12	16	4	2	1	139
	内訳(%)	74.8%	8.6%	11.5%	2.9%	1.4%	0.7%	100.0%
合計	度数(N)	168	27	16	4	4	1	220
	内訳(%)	76.4%	12.3%	7.3%	1.8%	1.8%	0.5%	100.0%

$$\chi^2=16.73, df=5, p<0.006$$

ここにもるように、進学希望の生徒は文系・理系の別に応じて進学先を選択している。湖陵高校は理系に所属する生徒が多く、文系進学希望の生徒が81名、理系進学希望の生徒が139名である。文系・理系共に、四年制国立大学の進学希望者が多くそれで四分之三を占める。文系は、四年制私立大学進学志望者が多いという点で特徴があるが、理系は逆に六年制国公立大学や六年制私立大学進学希望者が多い。これは、それぞれ志望する学科の関係もあり、特に後者の医学・歯学・薬学・獣医学の学科に進学するときは、六年制となることによっている。また国公立大学と私立大学の比率で考えると、前者が8割を超えて、国公立大学志望が中心となっていることもわかる。

図表2 進学先学校と進学先地域のクロス表

		首都圏	東北地方	その他の道外	札幌市内・周辺	釧路市周辺	その他の道内	合計
四年制国立大学	度数(N)	49	21	16	57	10	16	169
	内訳(%)	29.0	12.4	9.5	33.7	5.9	9.5	100.0
	調整済み残差	-1.03	<b>2.21</b>	0.39	-0.63	-0.46	0.39	
四年制私立大学	度数(N)	18	0	0	7	0	1	26
	内訳(%)	69.2	0.0	0.0	26.9	0.0	3.8	100.0
	調整済み残差	<b>4.52</b>	-1.80	-1.71	-0.90	-1.41	-0.98	
六年生国立大学	度数(N)	1	1	3	8	0	3	16
	内訳(%)	6.3	6.3	18.8	50.0	0.0	18.8	100.0
	調整済み残差	-2.21	-0.51	1.40	1.32	-1.08	1.40	
六年生私立大学	度数(N)	0	0	0	4	0	0	4
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
	調整済み残差	-1.35	-0.67	-0.64	<b>2.76</b>	-0.52	-0.64	
専門・各種学校	度数(N)	0	0	0	0	4	0	4
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0
	調整済み残差	-1.35	-0.67	-0.64	-1.48	<b>7.76</b>	-0.64	
未定	度数(N)	0	0	0	1	0	0	1
	内訳(%)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
	調整済み残差	-0.67	-0.33	-0.32	1.37	-0.26	-0.32	
その他	度数(N)	0	0	1	0	0	0	1
	内訳(%)	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	調整済み残差	-0.67	-0.33	<b>3.18</b>	-0.73	-0.26	-0.32	
合計	度数(N)	68	22	20	77	14	20	221
	内訳(%)	30.8	10.0	9.0	34.8	6.3	9.0	100.0

$\chi^2=109.00, df=30, p<0.000$

進学先地域を進学先学校別に集計したものが図表2である。

図表中で使用されている「調整済み残差」は、そのセルの平均的な数字からのズレを表すもので、符号はズレの方向性（大きい方へ、あるいは少ない方へ）を表し、数字は標準偏差の何倍であるかを表している。そのため、「調整済み残差」が2を超えると、平均とかなりズレる数字をもったセルであることがわかる。

全体的にみて、進学先と進学先地域は大きく関係していることがわかる。それは、図表の枠外にあるカイ二乗検定（「独立性の検定」）の数字のうち有意確率（p）が低いことから裏付けられる。

進学先学校別にみておくと、四年制国立大学進学希望者は札幌市とその周辺に多く、それに首都圏が続く。そして東北地方に進学先地域をみている生徒も多い。道内にとどまっていない。同様に、四年制私立大学進学志望者は首都圏の大学を志望し、六年制国立大学進学希望者は、広く道内の大学を希望している。他方で六年制私立大学進学希望者は札幌市・周辺になる。これも具体的な進学希望大学の所在地によっていると思われる。

ところで専門・各種学校進学希望者は釧路市周辺に集中している。道内の専門学校は一般的には札幌市とその周辺に集中しているため、これも具体的な専門学校が念頭にあり、かつ自宅から通学できることが重要な選択であることが理解できる。

そしてこの進学先地域の想定は、生徒が男子であるのか、それとも女子であるのかといったこととも大きく関係する（図表3）。

図表3 男女別進学先地域

		首都圏	東北地方	その他の道外	札幌市内・周辺	釧路市内・周辺	その他の道内	合計
男子生徒	度数(N)	39	16	11	33	4	5	108
	内訳(%)	36.1%	14.8%	10.2%	30.6%	3.7%	4.6%	100.0%
女子生徒	度数(N)	28	6	9	44	10	15	112
	内訳(%)	25.0%	5.4%	8.0%	39.3%	8.9%	13.4%	100.0%
合計	度数(N)	67	22	20	77	14	20	220
	内訳(%)	30.5%	10.0%	9.1%	35.0%	6.4%	9.1%	100.0%

$\chi^2=15.63, df=5, p<0.008$

全体的に札幌市とその周辺は多いのであるが、男子学生は首都圏や東北地方等の道外への進学にシフトしており、女子生徒は広く道内への進学にシフトしている。道内の進学について一般的に、「親は女子生徒を親元から離したくない」と言われている。ここでわかるのはそれとは違って、釧路市内・周辺に止めておくのではないことだ。しかし実家近くは意識しており、それが生徒の進学先を考える際の判断の基準ともなっていると思われる。

図表4 進学先学校と進学先分野のクロス表

		進学先分野															合計	
		人文系(社会学を含む)	外国語系	法学系	経済・経営系	理学系	工学系	教育系	家政(生活科学)系	医・獣医・歯・薬系	芸術系	農・水産系	福祉系	看護・医療技術系	学際系(人間・環境・国際等)	その他		決めていない
四年制国公立大学	度数(N)	8	6	6	18	10	30	25	1	7	3	21	1	25	4	2	2	169
	内訳(%)	4.7%	3.6%	3.6%	10.7%	5.9%	17.8%	14.8%	0.6%	4.1%	1.8%	12.4%	0.6%	14.8%	2.4%	1.2%	1.2%	100.0%
四年制私立大学	度数(N)	3	0	2	9	1	0	0	1	2	2	1	1	4	0	1	0	27
	内訳(%)	11.1%	0.0%	7.4%	33.3%	3.7%	0.0%	0.0%	3.7%	7.4%	7.4%	3.7%	3.7%	14.8%	0.0%	3.7%	0.0%	100.0%
六年生国公立大学	度数(N)	0	0	0	0	0	0	0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	16
	内訳(%)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
六年生私立大学	度数(N)	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
	内訳(%)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
専門・各種学校	度数(N)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
	内訳(%)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
未定	度数(N)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	内訳(%)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
その他	度数(N)	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	内訳(%)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	度数(N)	11	6	8	27	12	30	25	2	29	5	22	2	33	4	3	3	222
	内訳(%)	5.0%	2.7%	3.6%	12.2%	5.4%	13.5%	11.3%	0.9%	13.1%	2.3%	9.9%	0.9%	14.9%	1.8%	1.4%	1.4%	100.0%

進学先学校別に進学先分野(学科)をみたものが図表4である。まず全体的な特徴を確認しておく。最も多くの生徒が進学を希望しているのは、「看護・医療技術系」(14.9%)である。10%以上のものを大きい方から順に上げてゆくと、「工学系」(13.5%)、「医・獣医・歯・薬系」(13.1%)、「経済・経営系」(12.2%)、「教育系」(11.3%)となる。「看護・医療技術系」、「医・獣医・歯・薬系」、「教育系」は資格の必要なものである。その点からいつて資格、すなわち将来の職業を意識した進路希望をもっていることがわかる。

図表は省略するが、これまでみてきたように進学先学校と進学先とは連動していたのであるから、当然、この進学先分野(学科)も男女別に違っている。特に大きな違いがあるものだけあげておく。男子生徒に多い進学先分野(学科)は、「工学系」と「経済・経営系」

である。女子生徒に多い進学先分野（学科）は、「看護・医療技術系」と「医・獣医・歯・薬系」である。このように、それぞれの職業的な見通しに媒介されて、進学先学校、進学先地域、進学先分野（学科）の男女分化が生じている。

## （２）進学理由と学校選択で重視すること

それでは次に進学理由についてみていこう。図表５である。

図表５ 進学理由

		はい	いいえ	合計
希望する職業に必要	度数(N)	128	94	222
	内訳(%)	57.7%	42.3%	100.0%
学生生活を楽しまたい	度数(N)	87	135	222
	内訳(%)	39.2%	60.8%	100.0%
自分の世界を広げるため	度数(N)	102	120	222
	内訳(%)	45.9%	54.1%	100.0%
自分の才能や能力をのばしたい	度数(N)	87	135	222
	内訳(%)	39.2%	60.8%	100.0%
自分の将来や進路を考える時間が欲しい	度数(N)	44	178	222
	内訳(%)	19.8%	80.2%	100.0%
まだ就職したくない	度数(N)	17	205	222
	内訳(%)	7.7%	92.3%	100.0%
進学する方が就職に有利だから	度数(N)	74	148	222
	内訳(%)	33.3%	66.7%	100.0%
みんながいくから	度数(N)	9	213	222
	内訳(%)	4.1%	95.9%	100.0%
ただなんとなく	度数(N)	7	215	222
	内訳(%)	3.2%	96.8%	100.0%
学びたい学問があるから	度数(N)	101	121	222
	内訳(%)	45.5%	54.5%	100.0%
人間関係をつくりたいから	度数(N)	42	180	222
	内訳(%)	18.9%	81.1%	100.0%
親がすすめるから	度数(N)	9	213	222
	内訳(%)	4.1%	95.9%	100.0%
先生がすすめるから	度数(N)	8	214	222
	内訳(%)	3.6%	96.4%	100.0%
まだやりたいことがみつからないから	度数(N)	23	199	222
	内訳(%)	10.4%	89.6%	100.0%
その他	度数(N)	7	215	222
	内訳(%)	3.2%	96.8%	100.0%

支持されている項目をみると、「希望する職業に必要」が最も多く 57.7%になっている。

やはり、進路指導の方針として強調されていた「大学を卒業してからの職業から逆算された大学選択」という考え方は、生徒の中に強く貫いていることがわかる。

日本の雇用社会の状況を考えるなら、それが職業的に編成されている領域とそうではない領域があり、明らかに後者が多い点に特徴がある。職業資格で雇用が「守られている」領域は限定されている。例えば、企業で雇用されることを考えたときに、前提となる資格は少ない。MBA であってもその所持で雇用が守られるわけではない。

生徒が支持している項目の確認にもどってみる。多い順にあげてゆくと、「自分の世界を広げるため」(45.9%)、「学びたい学問があるから」(45.5%)、「学生生活を楽しまたい」と「自分の才能や能力をのばしたい」(39.2%)、「進学する方が就職に有利だから」(33.3%)になっている。このように、将来の職業上の必要性を核に、自分をひろげのばしたいこと、そして学生生活を楽しむことの三つが進学理由としてあげられている。

そして注目したいのは、大学進学で一般的な進路モラトリウムを表す「自分の将来や進路を考える時間が欲しい」(19.8%)や「まだやりたいことがみつからない」(10.4%)、「まだ就職したくない」(7.7%)は少ないことである。また、より消極的な進学理由である「みんながいくから」(4.1%)や「ただなんとなく」(3.2%)も非常に少ない。

図表6 学校選択において重視すること

		全く大事ではない	あまり大事ではない	やや大事	とても大事	N.A.	計
ア. 伝統や学校の校風	度数(N)	9	30	121	62	0	222
	内訳(%)	4.1%	13.5%	54.5%	27.9%	0.0%	100.0%
イ. 研究施設や設備が充実している	度数(N)	1	8	67	146	0	222
	内訳(%)	0.5%	3.6%	30.2%	65.8%	0.0%	100.0%
ウ. 学びたいカリキュラムがある	度数(N)	0	2	40	180	0	222
	内訳(%)	0.0%	0.9%	18.0%	81.1%	0.0%	100.0%
エ. 取得できる資格がある	度数(N)	6	23	45	148	0	222
	内訳(%)	2.7%	10.4%	20.3%	66.7%	0.0%	100.0%
オ. 自分の学力と大学難易度ランキングが合っている	度数(N)	3	34	101	84	0	222
	内訳(%)	1.4%	15.3%	45.5%	37.8%	0.0%	100.0%
カ. 受験科目	度数(N)	7	29	96	88	2	222
	内訳(%)	3.2%	13.1%	43.2%	39.6%	0.9%	100.0%
キ. 授業料が安い	度数(N)	7	29	80	105	1	222
	内訳(%)	3.2%	13.1%	36.0%	47.3%	0.5%	100.0%
ク. 指導を受けたい教授がいる	度数(N)	25	88	73	35	1	222
	内訳(%)	11.3%	39.6%	32.9%	15.8%	0.5%	100.0%
ケ. 有名な大学である	度数(N)	17	82	85	38	0	222
	内訳(%)	7.7%	36.9%	38.3%	17.1%	0.0%	100.0%
コ. 就職指導やキャリア教育が充実している	度数(N)	5	21	80	116	0	222
	内訳(%)	2.3%	9.5%	36.0%	52.3%	0.0%	100.0%
サ. 入学金・授業料免除が充実している	度数(N)	8	50	85	78	1	222
	内訳(%)	3.6%	22.5%	38.3%	35.1%	0.5%	100.0%
シ. 自宅から通学できる	度数(N)	103	86	15	18	0	222
	内訳(%)	46.4%	38.7%	6.8%	8.1%	0.0%	100.0%
ス. 学生寮がある	度数(N)	58	87	55	22	0	222
	内訳(%)	26.1%	39.2%	24.8%	9.9%	0.0%	100.0%
セ. 就職実績が高い	度数(N)	4	17	74	127	0	222
	内訳(%)	1.8%	7.7%	33.3%	57.2%	0.0%	100.0%
ソ. 留学制度がある	度数(N)	49	91	50	32	0	222
	内訳(%)	22.1%	41.0%	22.5%	14.4%	0.0%	100.0%
タ. 推薦で入学できる	度数(N)	77	78	43	24	0	222
	内訳(%)	34.7%	35.1%	19.4%	10.8%	0.0%	100.0%
チ. 奨学金制度が充実している	度数(N)	16	36	81	89	0	222
	内訳(%)	7.2%	16.2%	36.5%	40.1%	0.0%	100.0%
ツ. その大学のある地域の物価が安い	度数(N)	36	74	73	39	0	222
	内訳(%)	16.2%	33.3%	32.9%	17.6%	0.0%	100.0%
テ. 親戚や兄弟が通っている	度数(N)	131	62	24	4	1	222
	内訳(%)	59.0%	27.9%	10.8%	1.8%	0.5%	100.0%
ト. 入りたい部活やサークルがある	度数(N)	73	77	57	14	1	222
	内訳(%)	32.9%	34.7%	25.7%	6.3%	0.5%	100.0%
ナ. 友だちが行くから	度数(N)	151	56	14	1	0	222
	内訳(%)	68.0%	25.2%	6.3%	0.5%	0.0%	100.0%
ニ. 親や先生にすすめられた	度数(N)	109	71	40	2	0	222
	内訳(%)	49.1%	32.0%	18.0%	0.9%	0.0%	100.0%
ヌ. 将来なりたい職業と関連が深い学部がある	度数(N)	6	6	32	178	0	222
	内訳(%)	2.7%	2.7%	14.4%	80.2%	0.0%	100.0%
ネ. 公務員試験などの合格実績が高い	度数(N)	21	42	73	85	1	222
	内訳(%)	9.5%	18.9%	32.9%	38.3%	0.5%	100.0%

これらのことから生徒は、消極的な選択としてではなく、先に述べた三つの積極的な進

学理由をもっていると言える。

次に具体的な学校を選択する際に重視することをみてみよう。図表6である。

これは24項目の選択理由をそれぞれ強度の異なる四つの選択肢から選択するものである。より強度のあるものを太字にしてある。「とても大事」に注目して順に上げてゆくと、「ウ. 学びたいカリキュラムがある」(81.1%)、「ヌ. 将来なりたい職業との関連が深い学部がある」(80.2%)、「エ. 取得できる資格がある」(66.7%)、「イ. 研究施設や設備が充実している」(65.8%)、「セ. 就職実績が高い」(57.2%)、「コ. 就職指導やキャリア教育が充実している」(52.3%)となる。これらが半数を超える生徒が支持したものだ。

逆に支持されていないものを、「全く大事ではない」に注目してあげてみると、「ナ. 友だちが行くから」(68.0%)、「テ. 親戚や兄弟が通っている」(59.0%)、「ニ. 親や先生にすすめられた」(49.1%)、「シ. 自宅から通学できる」(46.4%)となる。

印象としては、やはり職業を意識した項目を軸に、大学の施設設備が主要な選択理由となり、消極的な理由が退けられていることが指摘できる。これを多変量解析の手法のひとつである因子分析を行うことで、生徒の学校選択において重視する要因(この分析では、「因子」と呼ぶ)について考えてみる(図表7)。

図表7 学校選択の因子分析

	因子					
	1無難因子	2経済的負担考慮因子	3職業考慮因子	4学校魅力因子	5受験考慮因子	6評判考慮因子
ナ. 友達が行くから	<b>0.75</b>	-0.17	-0.02	-0.03	-0.01	0.14
テ. 親戚や兄弟が通っている	<b>0.67</b>	0.00	-0.02	-0.04	0.07	0.01
ニ. 親や先生にすすめられた	<b>0.65</b>	-0.11	0.12	-0.03	-0.05	0.11
シ. 自宅から通学できる	<b>0.62</b>	0.10	0.08	0.01	0.10	-0.20
ト. 入りたい部活やサークルがあるから	<b>0.54</b>	-0.07	0.00	-0.04	0.13	0.22
タ. 推薦で入学できる	<b>0.31</b>	0.11	0.18	0.11	0.13	-0.15
チ. 奨学金制度が充実している	-0.09	<b>0.74</b>	0.05	-0.04	-0.05	0.00
サ. 入学金・授業料免除が充実している	-0.10	<b>0.74</b>	0.02	-0.01	0.05	0.07
ツ. その大学のある地域の物価が安い	0.16	<b>0.64</b>	-0.09	-0.02	0.06	-0.03
キ. 授業料が安い	-0.11	<b>0.62</b>	-0.04	0.02	0.15	0.04
ス. 学生寮がある	0.35	<b>0.38</b>	0.01	0.01	-0.17	-0.18
ヌ. 将来になりたい職業と関連が深い学部がある	-0.03	-0.07	<b>0.73</b>	0.16	-0.34	-0.12
ネ. 公務員試験などの合格実績が高い	0.20	0.02	<b>0.65</b>	0.00	0.07	-0.03
エ. 取得できる資格がある	0.02	-0.02	<b>0.56</b>	-0.03	0.42	-0.07
セ. 就職実績が高い	-0.03	0.15	<b>0.46</b>	-0.11	-0.06	0.42
イ. 研究施設や設備が充実している	-0.09	-0.09	0.03	<b>0.61</b>	0.26	0.14
ウ. 学びたいカリキュラムがそろっている	-0.12	-0.11	0.29	<b>0.52</b>	0.10	-0.10
ク. 指導を受けたい教授がいる	0.05	0.25	-0.10	<b>0.51</b>	-0.08	0.09
ソ. 留学制度がある	0.17	-0.02	0.02	<b>0.34</b>	-0.23	0.25
オ. 自分の学力と大学難易度ランキングが合っている	0.09	0.02	-0.04	0.03	<b>0.50</b>	0.06
カ. 受験科目	0.04	0.14	-0.12	0.15	<b>0.41</b>	0.09
ケ. 有名な大学である	0.10	-0.02	-0.22	0.13	0.11	<b>0.57</b>
コ. 就職指導やキャリア教育が充実している	-0.04	0.23	0.27	0.03	0.06	<b>0.43</b>

因子相関行列

因子	1無難因子	2経済的負担考慮因子	3職業考慮因子	4学校魅力因子	5受験考慮因子	6評判考慮因子
1	—	<b>0.36</b>	0.20	0.06	0.10	0.10
2		—	<b>0.31</b>	0.25	0.09	<b>0.39</b>
3			—	0.16	<b>0.30</b>	0.21
4				—	-0.10	0.18
5					—	0.03
6						—

注1 太字は、50%を超えて「とても大事」と選択されたものを表している。

注2 24項目中「ア. 伝統や学校の校風」が因子負荷量が少ないため除外された。

因子を抽出する方法は主因子法を使用し、プロマックス回転をしてある。太字にしたものがひとつながりの項目（因子）である。図表6は生徒の学校選択を直接的にみたものであったが、この図表7は生徒の選択がどのように分かれるのかという点で重要なものがより強力な因子として取り上げられている。そのため、全員が支持する項目は因子としては強力ではない、という点を先に断っておく。

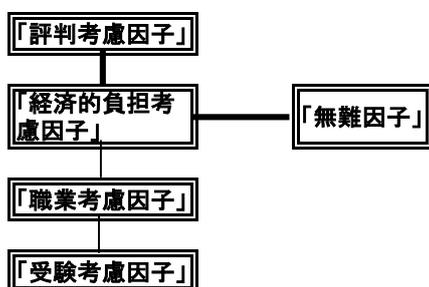
第1因子は、「ナ. 友だちが行くから」から「推薦で入学できる」までからなるもので、因子名を「無難因子」とした。第2因子は、「奨学金制度が充実している」から「学生寮がある」までからなるもので、因子名を「経済的負担考慮因子」とした。第3因子は、全体的に最も支持された項目群である「ヌ. 将来になりたい職業と関連が深い学部がある」から「セ. 就職実績が高い」までからなるもので、因子名を「職業考慮因子」とした。第4因

子は、これも支持された項目群であるが、「イ. 研究設備や施設が充実している」から「ソ. 留学制度がある」までからなるもので、因子名を「学校魅力因子」とした。第5因子は、「オ. 自分の学力と大学難易度ランキングが合っている」と「カ. 受験科目」からなるもので、因子名を「受験考慮因子」とした。そして最後の第6因子は、「ケ. 有名な大学である」と「コ. 就職指導やキャリア教育が充実している」からなる「評判考慮因子」である。

それぞれの因子の相関を調べたところ（因子相関行列）、「経済的負担考慮因子」と「評判考慮因子」の相関が高い（0.39）。同様に上げてゆくと、「無難因子」と「経済的負担考慮因子」の相関（0.36）、そして「経済的負担考慮因子」と「職業考慮因子」の相関（0.31）、「職業考慮因子」と「受験考慮因子」の相関（0.30）が高い。

以上の相関ことから、図示したのが図表8である。太線が強い相関を表している。

図表8 因子相関行列からみた因子間の関係



ここにみるように、ひとつの核は「経済的負担考慮因子」である。これを軸にして、「評判考慮因子」（ただし、これは一般的に有名であることに「コ. 就職指導やキャリア教育が充実している」が関わっていた）と「無難因子」（ここには安心できるという意味合いもある）、さらに「職業考慮因子」（最も支持されたもの）が結びついている。そして、「職業考慮因子」と受験の具体的な問題が考慮された「受験考慮因子」が結びつく。このような構造として理解される。すなわち、全体的な判断の要にあるのは、「経済的負担考慮因子」である。

さらにこれらの生徒毎に因子別の得点（因子得点）をつけ、具体的な進路選択の要因を分析してみたい。生徒毎の因子得点を文系／理系にまとめ平均得点を算出した（図表9）。

図表9 文系・理系別の学校選択において重視する要因の平均値の差

	文系	理系
無難因子	0.06	-0.04
経済的負担考慮因子	<b>0.16</b>	-0.09
職業考慮因子	0.00	-0.01
学校魅力因子	-0.04	0.03
受験考慮因子	-0.12	0.07
評判考慮因子	<b>0.12</b>	-0.07
度数(N)	78	137

これによると文系／理系で差があるのは、「経済的負担考慮因子」の得点と「評判考慮因子」の得点が文系で高いことである。文系の生徒は、この二つを重視した学校選択を行っているといえる。そして、職業の考慮という点では、文系／理系に差がないという点を、後の論点との関わりで指摘しておく。

さらに進学希望分野毎に平均値を算出してみる（図表10）。

図表10 進学希望分野別の因子毎の平均得点

	無難因子	経済的負担考慮因子	職業考慮因子	学校魅力因子	受験考慮因子	評判考慮因子	度数(N)
人文系(社会学を含む)	<b>0.22</b>	<b>0.31</b>	-0.16	<b>0.18</b>	-0.26	<b>0.12</b>	11
外国語系	-0.28	-0.15	<b>0.07</b>	<b>0.53</b>	-0.60	<b>0.54</b>	6
法学系	-0.59	<b>0.27</b>	-0.40	-0.14	-0.29	<b>0.13</b>	8
経済・経営系	<b>0.33</b>	<b>0.25</b>	-0.28	-0.32	<b>0.01</b>	<b>0.50</b>	25
理学系	-0.10	-0.13	-0.46	<b>0.69</b>	-0.49	<b>0.06</b>	12
工学系	-0.02	-0.24	-0.55	-0.03	<b>0.03</b>	<b>0.05</b>	30
教育系	<b>0.34</b>	<b>0.12</b>	<b>0.54</b>	-0.17	<b>0.21</b>	-0.13	25
家政(生活科学)系	<b>2.62</b>	<b>1.18</b>	<b>0.73</b>	<b>0.52</b>	<b>0.80</b>	0.00	1
医・獣医・歯・薬系	-0.15	-0.14	<b>0.28</b>	<b>0.18</b>	<b>0.04</b>	-0.34	29
芸術系	-0.62	<b>0.59</b>	-0.66	<b>0.43</b>	-1.09	-0.13	5
農・水産系	-0.16	-0.29	-0.15	-0.14	-0.08	-0.23	22
福祉系	-0.32	<b>0.04</b>	<b>0.43</b>	-0.11	<b>0.35</b>	-0.03	2
看護・医療技術系	-0.04	<b>0.13</b>	<b>0.56</b>	-0.05	<b>0.42</b>	-0.05	32
学際系(人間・環境・国際等)	-0.30	-0.08	-0.01	-0.08	<b>0.05</b>	<b>0.05</b>	4
その他	-0.20	-0.61	-0.36	<b>0.19</b>	-0.44	<b>0.16</b>	2
決めてない	<b>0.31</b>	-0.54	-0.11	-0.74	<b>0.07</b>	-0.18	3

平均値のプラスのものは、その因子が支持されていることを表し、マイナスはその逆である。進学希望者の多い分野（度数の高いもの）を中心にみてゆく。

進路希望分野で生徒数が最も多かったものは、「看護・医療技術系」であった（希望者 32 名）。この分野の生徒の因子得点の平均が高い、すなわち重視しているのは「職業考慮因子」と「受験考慮因子」である。同様にみてゆく。「工学系」（希望者 30 名）は、特徴がない。すなわち、全体的な平均に近い形になっている。「医・獣医・歯・薬系」（希望者 29 名）では「職業考慮因子」と「学校魅力因子」の平均点が高い。「教育系」（希望者 25 名）では、「職業考慮因子」と「無難因子」の点数が高い。「経済・経営系」（希望者 25 名）は、「評判考慮因子」、「無難因子」の点数が高い。

「職業考慮因子」の得点が高い（すなわち重視している）分野は、「教育系」、「家政系（ただし、1 名だけであるので例外的）」、「医・獣医・歯・薬系」、「福祉系」そして「看護・医療技術系」と資格が重要な職業分野に集中している。

この学校選択の因子分析の結果を軸に、進路選択の問題を考えてみたい。その前提として、進路選択から少し離れて、広く生徒が職業として具体的にどのような考え方をしているのか、またどのような生き方や価値志向をもっているのかをみてみよう。

### （3）学校選択の論理の射程——職業や価値志向との関係

まず、学校において「将来社会人になるために必要な学習」の内容があるかどうかを聞いた。これには、「ある」と答えた生徒が 176 名（77.2%）であり、「ない」と答えた生徒が 50 名（21.9%）である。学校において必要な学習はないと答えた生徒が一定数いる。

さらに、「ある」と答えた生徒のうちで、学習内容として何を上げているのかをみてみる（図表 11）。全体で 26 項目から選択してもらった。

多くの項目が選択されているが、これも多いものから順にみてみよう。

図表11 社会人になるために必要な学習内容

		はい	いいえ	合計
1. 生きること、働くことの意義	度数(N)	43	133	176
	内訳(%)	24.4%	75.6%	100.0%
2. 実際に働く体験(インターンシップ等)	度数(N)	70	106	176
	内訳(%)	39.8%	60.2%	100.0%
3. 勤労観・職業観(例:仕事とは何か等)	度数(N)	30	146	176
	内訳(%)	17.0%	83.0%	100.0%
4. 労働における男女差について	度数(N)	20	156	176
	内訳(%)	11.4%	88.6%	100.0%
5. いろいろな働く場所での具体的な労働条件(賃金・労働時間・職場環境等)について	度数(N)	38	138	176
	内訳(%)	21.6%	78.4%	100.0%
6. 労働者がもっている権利	度数(N)	29	147	176
	内訳(%)	16.5%	83.5%	100.0%
7. 就きたい職業の具体的な内容や必要とされる能力	度数(N)	62	114	176
	内訳(%)	35.2%	64.8%	100.0%
8. 仕事で実際に使える知識や技術の訓練	度数(N)	58	118	176
	内訳(%)	33.0%	67.0%	100.0%
9. 他人と接するコミュニケーション能力の訓練	度数(N)	106	70	176
	内訳(%)	<b>60.2%</b>	39.8%	100.0%
10. 様々な職業のそれぞれがもつ役割や意義	度数(N)	25	151	176
	内訳(%)	14.2%	85.8%	100.0%
11. 仕事と家庭のあり方	度数(N)	22	154	176
	内訳(%)	12.5%	87.5%	100.0%
12. 人生設計の考え方	度数(N)	39	137	176
	内訳(%)	22.2%	77.8%	100.0%
13. 企業の仕組みについて	度数(N)	31	145	176
	内訳(%)	17.6%	82.4%	100.0%
14. 産業や経済の現状についての知識	度数(N)	40	136	176
	内訳(%)	22.7%	77.3%	100.0%
15. 社会貢献やボランティアについて	度数(N)	38	138	176
	内訳(%)	21.6%	78.4%	100.0%
16. 自分を知ること	度数(N)	80	96	176
	内訳(%)	45.5%	54.5%	100.0%
17. 職業やキャリア情報の調べ方	度数(N)	21	155	176
	内訳(%)	11.9%	88.1%	100.0%
18. 資格の情報(どこで取れるのか、どれくらい役立つか)	度数(N)	61	115	176
	内訳(%)	34.7%	65.3%	100.0%
19. 自分にとっての生きがいや働きがいについて考えること	度数(N)	38	138	176
	内訳(%)	21.6%	78.4%	100.0%
20. 社会人としての考え方やふるまい	度数(N)	90	86	176
	内訳(%)	<b>51.1%</b>	48.9%	100.0%
21. 基礎的な生活習慣	度数(N)	53	123	176
	内訳(%)	30.1%	69.9%	100.0%
22. マナーや礼儀	度数(N)	135	41	176
	内訳(%)	<b>76.7%</b>	23.3%	100.0%
23. 基礎学力	度数(N)	68	108	176
	内訳(%)	38.6%	61.4%	100.0%
24. 仕事を選ぶとき、どんなことを注意すればいいか	度数(N)	27	149	176
	内訳(%)	15.3%	84.7%	100.0%
25. 自分がどんな仕事に向いているか	度数(N)	56	120	176
	内訳(%)	31.8%	68.2%	100.0%
26. その他	度数(N)	5	171	176
	内訳(%)	2.8%	97.2%	100.0%

「22. マナーや礼儀」(76.7%)、「9. 他人と接するコミュニケーション能力の訓練」(60.2%)、「20. 社会人としての考え方やふるまい」(51.1%)が半数を超える生徒が選択したものである。そして「16. 自分を知ること」(45.5%)が続く。30%台は、「2. 実際に働く体験(イ

ンターンシップ等)」、「23. 基礎学力」、「7. 就きたい職業の具体的な内容や必要とされる能力」、「18. 資格の情報（どこで取れるのか、どれくらい役立つか）」、「8. 仕事で実際に使える知識や技術の訓練」、「25. 自分がどんな仕事に向いているか」となる。

前述したように生徒は、全体として職業を考慮して進学を考えるという志向がはっきりしていた。しかし、具体的な学習のイメージは一般化している。例えば、実際に働くことを考えたときに、具体的な労働条件、「6. 労働者がもっている権利」、「24. 仕事を選ぶとき、どんなことを注意すればよいか」、「4. 労働における男女差について」は重要であるが、学習内容として必要なものだとは考えられてはいない。このような意味で、大学選択のための「情報」としての職業に対する関心の高さと、その職業を取り囲む具体的な状況への関心の薄さは対比をみせる。しかし、まだ実際に職業に就くまでの期間を考えるとそのようなものかもしれない。

ところで生徒の希望する職業は具体的には何か。将来就きたい職業を確認しておく（図表12）。

図表12 将来就きたい職業(進学者のみ)

	度数(N)	内訳
技術職	16	7.2%
専門職	122	55.0%
管理職	8	3.6%
事務職	13	5.9%
技能職	2	0.9%
販売職	4	1.8%
サービス職	1	0.5%
職人的仕事	1	0.5%
保安	3	1.4%
農林漁業	3	1.4%
その他	11	5.0%
まだわからない	21	9.5%
N.A.	17	7.7%
合計	222	100.0%

※ その他は、マスコミ関係会社、NPO・NGO職員、漫画家、政治家、イベントプランナー等

職業への考慮は、「専門職」（55.0%）に過半が集中する構成となっている。これに、「技術職」（7.2%）、「事務職」（5.9%）が続く。そして、「まだわからない」という職業が選ばなかった生徒もかなりいることがわかる（9.5%）。この項目への無回答（7.7%）も同趣旨のものが混じっているかもしれない。

しかしこの「まだわからない」は、日本の雇用社会の現状を考慮するならば、一概に消極的な解答だとは考えられない。日本の雇用社会は、一部の法律・資格によって律せられた領域（「業務独占資格」。医者や弁護士等）以外は、雇用される身分に応じて柔軟に働くという構成をとっているからである。そのため大企業に雇用された場合、文系では初期に事務職としてキャリアを開始し、キャリアの後半で運がよければ管理職となる。理系でも四年制大学卒業で直接技術者になることは考えにくい。そして同様に、キャリアの後半で運がよければ管理職となる。このような事情をどこまで生徒が知っているのかはわからな

い。すなわち希望が集中する専門職とは、第一にイメージが可能であり、第二にそのための資格が設定され、取得可能な教育課程があり、第三に進学可能性が高い、これらの要件がみたされることからくる専門職志向である。半数超の生徒にとって、専門職は可能な職業である。技術職を除いたそれ以外の職業は、イメージすることが難しいものと思われる。湖陵高校において半数を超える生徒が専門職に就くことを希望する背景には、これらの条件が可能になっているからであろう。

そして生徒が所属する文系／理系の違いは、職業希望に大きな差を生じさせる（図表13）。

図表13 文系・理系別将来就きたい職業

		将来就きたい職業											合計	
		技術職	専門職	管理職	事務職	技能職	販売職	サービス職	職人的仕事	保安	農林漁業	その他		まだわからない
文系	度数(N)	0	33	7	10	1	4	1	0	2	0	10	8	76
	内訳(%)	0.0	43.4	9.2	13.2	1.3	5.3	1.3	0.0	2.6	0.0	13.2	10.5	100.0
	調整済み残差	-3.20	-3.60	<b>3.01</b>	<b>3.07</b>	0.38	<b>2.63</b>	1.31	-0.77	1.07	-1.34	<b>3.80</b>	0.10	
理系	度数(N)	16	89	1	3	1	0	0	1	1	3	1	13	129
	内訳(%)	12.4	69.0	0.8	2.3	0.8	0.0	0.0	0.8	0.8	2.3	0.8	10.1	100.0
	調整済み残差	<b>3.20</b>	<b>3.60</b>	-3.01	-3.07	-0.38	-2.63	-1.31	0.77	-1.07	1.34	-3.80	-0.10	
合計	度数(N)	16	122	8	13	2	4	1	1	3	3	11	21	205
	内訳(%)	7.8	59.5	3.9	6.3	1.0	2.0	0.5	0.5	1.5	1.5	5.4	10.2	100.0

$\chi^2=58.04, df=11, p<0.000$

文系は、「その他」、「事務職」、「管理職」、そして「販売職」が多い。理系は、「技術職」と「専門職」に集中する。文系で可能な専門職のイメージ（文系でも進学が可能な「看護・医療技術系」を除いて）は、なれる可能性が高いものとしては「教員」が、なれる可能性が低いものとしては「法曹等（法律関係の専門職）」に限定される。理系は、工学部進学＝技術職希望、理学部進学＝専門職（研究職）希望、医学部等進学＝専門職希望が思い浮かびやすい。

前述したように、日本の雇用社会の構成の在り方が影響を及ぼす。そして文系／理系の違いは、選択可能な進学先を介して職業希望の差となって表れている。

大きな図表となるため省略するが、主要進学希望分野と職業の対応を確認しておく。

「技術職」は、「工学系」に集中する。将来、「技術職」に就きたいと希望する生徒の87.5%が進学希望分野は「工学系」である。以下、同様にみてゆく。「専門職」は、「看護・医療技術系」（26.2%）、「医・獣医・歯・薬系」（23.0%）、「教育系」（19.7%）である。この三つの進学希望分野の生徒は、全員が「専門職」を希望している。「事務職」は、「経済・経営系」（69.2%）である。逆に「まだわからない」では、「経済・経営系」（23.8%）と「農・水産系」（23.8%）となっている。

前述したように、進路指導の力点のひとつが大学卒業後の職業を意識した大学選択であった。それが文系／理系に関わらず生徒に浸透していることは図表9で確認した。そして図表13にみるように、文系においても職業を重視した希望をもっている。しかしながら、日本の雇用社会の現実からくる文系の延長線上にくる職業のイメージのつかないさは、「まだわからない」を顕著に多くし、「事務職」、「管理職」、「販売職」を選んだにしても、その点は変わらない。

職業・勤め先の選択で重視することを複数回答と聞いたものが図表14である。

図表14 職業・勤め先選択で重視すること(複数回答)

		はい	いいえ	合計
1. 自分の技能・能力を活かせること	度数(N)	137	87	224
	内訳(%)	61.2%	38.8%	100.0%
2. 仕事の内容・職種	度数(N)	167	57	224
	内訳(%)	74.6%	25.4%	100.0%
3. 会社の規模・知名度	度数(N)	29	195	224
	内訳(%)	12.9%	87.1%	100.0%
4. 会社の将来性	度数(N)	46	178	224
	内訳(%)	20.5%	79.5%	100.0%
5. 仕事の社会的意義	度数(N)	37	187	224
	内訳(%)	16.5%	83.5%	100.0%
6. 会社が実力主義であること	度数(N)	9	215	224
	内訳(%)	4.0%	96.0%	100.0%
7. 通勤に便利であること	度数(N)	10	214	224
	内訳(%)	4.5%	95.5%	100.0%
8. 実家から通えること	度数(N)	4	220	224
	内訳(%)	1.8%	98.2%	100.0%
9. 賃金の条件がよいこと	度数(N)	108	116	224
	内訳(%)	48.2%	51.8%	100.0%
10. 労働時間・休日・休暇の条件が多いこと	度数(N)	55	169	224
	内訳(%)	24.6%	75.4%	100.0%
11. 勤務地	度数(N)	15	209	224
	内訳(%)	6.7%	93.3%	100.0%
12. 転勤がない・転勤の地域限定されていること	度数(N)	12	212	224
	内訳(%)	5.4%	94.6%	100.0%
13. 福利厚生	度数(N)	9	215	224
	内訳(%)	4.0%	96.0%	100.0%
14. 労働組合があること	度数(N)	0	224	224
	内訳(%)	0.0%	100.0%	100.0%
15. その他	度数(N)	4	220	224
	内訳(%)	1.8%	98.2%	100.0%

生徒が職業・勤め先選択で重視することは、「仕事の内容・職種」が多い(74.6%)。同様に、「自分の技能・能力を活かせること」(61.2%)が多い。ところで、学校選択において重視する要因の核として「経済的負担考慮因子」を指摘しておいたが、労働条件に関する項目のなかで、とりわけ「賃金の条件がよいこと」(48.2%)の支持が高いことと関係しているだろう。これ以外の条件はあまり選択されていない。

全体的に将来なりたい職業が専門職に強くシフトしているため、一般的な会社選択や労働条件は重視していないものと考えられる。やはりここからも、強い職業への関心は進路を選択するという観点から導き出されたものであり、具体的な職業の状況や環境への関心としての広がりはないのではないかと考えられる。

職業志向との関係についても確認しておこう(図表15)。

図表15 将来の職業と生活の考え方

		そう思わない	どちらかといえばそう思わない	どちらかといえばそう思う	そう思う	N.A.	合計
ア. 仕事以外に自分の生きがいをもちたい	度数(N)	2	4	49	173	0	228
	内訳(%)	0.9%	1.8%	21.5%	<b>75.9%</b>	0.0%	100.0%
イ. 若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろ経験したい	度数(N)	25	85	63	55	0	228
	内訳(%)	11.0%	<b>37.3%</b>	27.6%	24.1%	0.0%	100.0%
ウ. 専門的な知識や技術を磨きたい	度数(N)	1	19	81	126	1	228
	内訳(%)	0.4%	8.3%	35.5%	<b>55.3%</b>	0.4%	100.0%
エ. 人よりも高い収入を得たい	度数(N)	10	43	110	65	0	228
	内訳(%)	4.4%	18.9%	<b>48.2%</b>	28.5%	0.0%	100.0%
オ. 有名になりたい	度数(N)	63	99	42	24	0	228
	内訳(%)	27.6%	<b>43.4%</b>	18.4%	10.5%	0.0%	100.0%
カ. 人の役に立つ仕事をしたい	度数(N)	10	18	66	134	0	228
	内訳(%)	4.4%	7.9%	28.9%	<b>58.8%</b>	0.0%	100.0%
キ. あまり頑張らず、のんびりとくらしたい	度数(N)	27	97	76	28	0	228
	内訳(%)	11.8%	<b>42.5%</b>	33.3%	12.3%	0.0%	100.0%
ク. 安定した職業生活をおくりたい	度数(N)	3	11	67	147	0	228
	内訳(%)	1.3%	4.8%	29.4%	<b>64.5%</b>	0.0%	100.0%
ケ. 自分に合わない仕事ならしたくない	度数(N)	7	46	85	90	0	228
	内訳(%)	3.1%	20.2%	37.3%	<b>39.5%</b>	0.0%	100.0%
コ. 将来の生活については考えていない	度数(N)	102	89	34	3	0	228
	内訳(%)	<b>44.7%</b>	39.0%	14.9%	1.3%	0.0%	100.0%

全体的な傾向を「そう思う」を中心に整理しよう。

最も支持されている考え方は、意外にも「ア. 仕事以外に自分の生きがいをもちたい」である（75.9%）。以下順に、「ク. 安定した職業生活をおくりたい」（64.5%）、「カ. 人の役に立つ仕事をしたい」（58.8%）、「ウ. 専門的な知識や技術をみがきたい」（55.3%）、「ケ. 自分に合わない仕事ならしたくない」（39.5%）である。

逆に支持されていない考え方は、「コ. 将来の生活については考えていない」（1.3%）である。

まず、「仕事以外の生きがい」がもてることを考え、そのためには「安定した職業生活」が必要であるという考え方である。そして、その次に「人の役に立つ仕事」と「専門的な知識や技術を磨くこと」がくる。前者の「仕事以外の生きがい」と「安定した職業生活」の重視と、後者の「人の役に立つ仕事」と「専門的な知識や技術を磨くこと」がどのような関係にあるのかが重要な点である。後者は、前者のための手段として位置づいているのだろうか。

さらに、学校選択において重視する要因との関係をもてみる（図表16）。

図表 16 学校選択因子(得点)と職業志向

		仕事以外に自分の生きがいをもちたい	若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろな経験したい	専門的な知識や技術を磨きたい	人よりも高い収入を得たい	有名になりたい	人の役に立つ仕事をしたい	あまり頑張らなくても、のんびりとくらしたい	安定した職業生活を送りたい	自分に合わない仕事ならしたくない	将来の生活については考えていない
無難因子	Pearson の相関係数	0.00	0.15	0.03	0.20	0.12	0.16	<b>0.24</b>	0.18	0.08	0.21
	有意確率(両側)	0.987	0.026	0.631	0.004	0.080	0.017	0.000	0.008	0.219	0.002
	N	217	217	216	217	217	217	217	217	217	217
経済的負担考慮因子	Pearson の相関係数	0.01	0.14	0.05	0.17	0.16	<b>0.24</b>	0.04	0.19	0.06	0.06
	有意確率(両側)	0.849	0.033	0.510	0.010	0.017	0.000	0.562	0.005	0.398	0.346
	N	217	217	216	217	217	217	217	217	217	217
職業考慮因子	Pearson の相関係数	0.03	-0.09	0.17	0.10	0.00	<b>0.44</b>	-0.12	<b>0.41</b>	-0.04	<b>-0.28</b>
	有意確率(両側)	0.643	0.180	0.014	0.130	0.945	0.000	0.078	0.000	0.536	0.000
	N	217	217	216	217	217	217	217	217	217	217
学校魅力因子	Pearson の相関係数	0.04	0.01	0.14	-0.05	-0.04	0.13	-0.15	0.02	0.06	-0.12
	有意確率(両側)	0.550	0.898	0.036	0.423	0.550	0.048	0.026	0.717	0.387	0.088
	N	217	217	216	217	217	217	217	217	217	217
受験考慮因子	Pearson の相関係数	0.07	0.03	-0.01	0.12	0.04	<b>0.34</b>	0.02	<b>0.37</b>	0.09	0.04
	有意確率(両側)	0.330	0.614	0.875	0.083	0.578	0.000	0.797	0.000	0.166	0.606
	N	217	217	216	217	217	217	217	217	217	217
評判考慮因子	Pearson の相関係数	0.14	0.14	-0.02	0.23	<b>0.26</b>	0.22	-0.05	0.21	0.12	-0.05
	有意確率(両側)	0.034	0.033	0.752	0.001	0.000	0.001	0.501	0.002	0.076	0.463
	N	217	217	216	217	217	217	217	217	217	217

全体的な特徴を説明する。太字になっているものがそれぞれの因子と相関の非常に強いものである。

まず「職業考慮因子」から説明する。「職業考慮因子」と強く関係しているのは三つの項目である。強い順に、「人の役に立つ仕事をしたい」、「安定した職業生活を送りたい」、「将来の生活については考えていない」（これは符号が負）となる。将来の生活について考えるから職業を考慮し、職業を考慮することとは、「人の役に立つ仕事」だからであり、それは同時に「安定した職業」だからである。このような理解であると考えられる。重要なことは、「専門的な知識や技術を磨きたい」とは相関があるものの、あまり強くないことである。

次に「受験考慮因子」を説明する。「受験考慮因子」と強く関係しているのはふたつの項目である。強い順に「安定した職業生活を送りたい」、「人の役に立つ仕事をしたい」である。项目的には「職業考慮因子」と類似する。ただし、「将来の生活については考えていない」がなく、強さの順番が逆になっている。安定した職業生活の優先の上に、人の役に立つ仕事をするを考えている。

これ以外の因子では関係する項目がひとつ、ないしゼロになる。

「無難因子」は「あまり頑張らなくても、のんびりとくらしたい」が、「経済的負担考慮因子」は「人の役に立つ仕事をしたい」が、「評判考慮因子」は「有名になりたい」が非常に強い相関となっている。

このように職業を考慮する際には、「安定した職業生活を送ること」も同時に願っている。しかし、それは労働条件を考慮することとは関わっていない（前項図表 14 の分析参照）。

さらに、より広く「生きていく中で重要なこと」として何を念頭においているのかという観点から職業を考慮する際の視野の膨らみについて考えてみる（図表 17）。

図表17 生きていく中で重要なこと

		全く重要ではない	あまり重要ではない	やや重要である	かなり重要である	N.A.	合計
ア. 高い社会的地位につくこと	度数(N)	15	57	123	33	0	228
	内訳(%)	6.6%	25.0%	<b>53.9%</b>	14.5%	0.0%	100.0%
イ. 広く社会のために尽くすこと	度数(N)	5	32	99	92	0	228
	内訳(%)	2.2%	14.0%	<b>43.4%</b>	40.4%	0.0%	100.0%
ウ. 自分らしい人生を送ること	度数(N)	0	2	35	191	0	228
	内訳(%)	0.0%	0.9%	15.4%	<b>83.8%</b>	0.0%	100.0%
エ. 温かい家庭を築くこと	度数(N)	7	19	68	134	0	228
	内訳(%)	3.1%	8.3%	29.8%	<b>58.8%</b>	0.0%	100.0%
オ. 仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつこと	度数(N)	1	10	82	135	0	228
	内訳(%)	0.4%	4.4%	36.0%	<b>59.2%</b>	0.0%	100.0%
カ. 高い収入を得ること	度数(N)	5	28	126	69	0	228
	内訳(%)	2.2%	12.3%	<b>55.3%</b>	30.3%	0.0%	100.0%
キ. 自分に適した職業を見つけること	度数(N)	0	3	50	174	1	228
	内訳(%)	0.0%	1.3%	21.9%	<b>76.3%</b>	0.4%	100.0%
ク. 仕事に生きること	度数(N)	12	100	95	20	1	228
	内訳(%)	5.3%	<b>43.9%</b>	41.7%	8.8%	0.4%	100.0%
ケ. 遠い目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること	度数(N)	18	92	90	28	0	228
	内訳(%)	7.9%	<b>40.4%</b>	39.5%	12.3%	0.0%	100.0%
コ. どんなことにもチャレンジすること	度数(N)	0	17	92	119	0	228
	内訳(%)	0.0%	7.5%	40.4%	<b>52.2%</b>	0.0%	100.0%

「かなり重要である」に注目し全体的な動向をみてる。最も支持されたのは、「ウ. 自分らしい人生を送ること」である（83.8%）である。圧倒的である。これに続くものを順に上げてゆくと、「キ. 自分に適した職業を見つけること」（76.3%）、「オ. 仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつこと」（59.2%）、「エ. 温かい家庭を築くこと」（58.8%）、そして「イ. 広く社会のために尽くすこと」（40.4%）となる。

専門職志向は強いが、専門職にとっての社会的な貢献という一般的な責務はあまり高い支持を得ていない。代わりに私生活的な価値への高い支持を見出すことができる。これは前述の職業志向の分析の結果とも符合する。

この推理を検証するために、学校選択において重視する要因のうち、「職業考慮因子」に絞って因子得点と将来志向との相関を計算した（図表18）。

図表18 学校選択因子(得点)と将来志向の相関

		高い社会的地位につく	広く社会のために尽くす	自分らしい人生を送る	暖かい家庭を築く	仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつ	高い収入を得る	自分に適した職業を見つける	仕事に生きる	遠い将来の目標のために努力するより、現在したいことをする	どんなことにもチャレンジする
職業考慮因子	Pearsonの相関係数	0.17	<b>0.34</b>	0.01	<b>0.33</b>	-0.03	0.14	0.15	0.23	-0.19	0.07
	有意確率(両側)	0.010	0.000	0.832	0.000	0.674	0.040	0.027	0.001	0.006	0.320
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	216	216	217	217

ここから分かるように「職業考慮因子」と関係の深く関係するのは、「広く社会のために尽くすこと」である（相関係数 0.34。以下、係数のみ）が、同時に「暖かい家庭を築く」もある（0.33）。また他に相関があるものは、「仕事に生きる」（0.23）、「遠い未来のために

コツコツと努力するより、現在したいことをすること」(-0.19)、「高い社会的地位につくこと」(0.17)、「高い収入を得ること」(0.14)が上がる。

このようにみても、職業を考慮する際の視野の膨らみは、高い社会的地位や高い収入の獲得までも含まれる。生活の安定（あるいは良い生活）と並立するものだ。ただし重要なのは、現代日本の若者において広範な広がりを見せる価値である「現在充足志向」（この項目では「遠い未来のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること」とマイナスの相関があることである。学校選択において重視する要因（因子）の中で、「現在充足志向」と抗するものは、「職業考慮因子」だけである。その意味で、未来に向けて今を有意義に生きる志向性は、この因子に表れていると言える。

すなわち、進路指導方針の核に大学卒業後の職業を考えさせることは、学習モチベーションをもたせる上で、効果を発揮していることが証明された。

さらに、社会や社会の中での自分という観点から職業を考える射程をみてみよう（図表19）。

図表19 自分や社会の捉え方

	そう 思わ ない	どちらか といえ ば そう 思わ ない	どちらか といえ ば そう 思 う	そう 思 う	合計
ア. どんなことにも、努力して高い目標を達成することは大切だ	0 0.0%	12 5.3%	73 32.0%	143 <b>62.7%</b>	228 100.0%
イ. 社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ	6 2.6%	22 9.6%	68 29.8%	132 <b>57.9%</b>	228 100.0%
ウ. どのような学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう。	51 22.4%	79 <b>34.6%</b>	70 30.7%	28 12.3%	228 100.0%
エ. 学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ	26 11.4%	75 32.9%	79 <b>34.6%</b>	48 21.1%	228 100.0%
オ. 今の生活には満足している	21 9.2%	49 21.5%	108 <b>47.4%</b>	50 21.9%	228 100.0%
カ. この社会には夢や希望は沢山ある	23 10.1%	74 32.5%	87 <b>38.2%</b>	44 19.3%	228 100.0%
キ. 今は夢が叶いにくい世の中だ	9 3.9%	52 22.8%	107 <b>46.9%</b>	60 26.3%	228 100.0%
ク. 自分は将来、大きなことをして成功すると思う	29 12.7%	122 <b>53.5%</b>	54 23.7%	23 10.1%	228 100.0%
ケ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う	6 2.6%	44 19.3%	109 <b>47.8%</b>	69 30.3%	228 100.0%

支持の高いものから、「そう思う」に注目して順に確認しておく。「ア. どんなことにも、努力して高い目標を達成することは大切だ」(62.7%)、「イ. 社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ」(57.9%)という「努力」を評価する項目の支持は高い。これに続くのは、「自分の将来は幸せなものになっていると思う」(30.3%)だが、他方で「キ. 今は夢が叶いにくい世の中だ」(26.3%)の支持も高い。学歴について聞いた「ウ. どのような学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう」や「エ. 学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ」は賛否が相半ばしている。「オ. 今の生活には満足している」は肯定が多いが(69.3%)、否定も3割を超えている(31.7%)。

図表20 「職業考慮因子」(得点)と社会と自己の捉え方についてのクロス表

		どんなことでも、努力して高い目標を達成することは大切	社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第	どのような学校を出たかにより人生がほとんど決まる	学歴により社会的地位や収入が異なるのは当然	今の生活には満足している	この社会には夢や希望は沢山ある	今は夢が叶いにくい世の中だ	自分は将来、大きなことをして成功すると思う	自分の将来は幸せなものになっていると思う
職業考慮因子	Pearsonの相関係数	0.10	<b>0.20</b>	-0.05	0.04	<b>0.15</b>	<b>0.16</b>	-0.09	-0.06	<b>0.14</b>
	有意確率(両側)	0.138	0.003	0.432	0.510	0.024	0.017	0.187	0.357	0.036
	N	217	217	217	217	217	217	217	217	217

総じて努力への信頼があることが重要である。こういった考え方は、学校選択における「職業考慮因子」とどのような関係にあるのだろうか(図表20)。

太字になっているものが相関のあるものである。強いものから確認しておく、「社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ」(0.20)、「この社会には夢や希望は沢山ある」(0.16)、「今の生活には満足している」(0.15)、そして「自分の将来は幸せなものになっていると思う」(0.14)となる。

職業を重視する考え方は、自分の努力次第で社会的な成功が決まるという考え方を基礎に、社会と自分の未来に対する楽観的な見通しと、現在の生活の満足と関わっている。

#### (4) 進路選択で直面していること

以上のような射程をもった職業(具体的には専門職)を重視する考え方は、進路選択上のどのような問題と関係するのだろうか。

最初に、相談相手についてみておきたい(図表21)。

図表21 進路について相談する人(複数回答)

		はい	いいえ	合計
親	度数(N)	185	43	228
	内訳(%)	81.1%	18.9%	100.0%
学校の先生	度数(N)	150	78	228
	内訳(%)	65.8%	34.2%	100.0%
塾の先生	度数(N)	94	134	228
	内訳(%)	41.2%	58.8%	100.0%
学校の友だち	度数(N)	138	90	228
	内訳(%)	60.5%	39.5%	100.0%
塾の友だち	度数(N)	28	200	228
	内訳(%)	12.3%	87.7%	100.0%
先輩	度数(N)	53	175	228
	内訳(%)	23.2%	76.8%	100.0%
親戚	度数(N)	19	209	228
	内訳(%)	8.3%	91.7%	100.0%
メールやインターネットで知り合った人	度数(N)	8	220	228
	内訳(%)	3.5%	96.5%	100.0%
その他	度数(N)	9	219	228
	内訳(%)	3.9%	96.1%	100.0%

何よりも「親」との相談が多い(81.1%)。そして「学校の先生」(65.8%)、「学校の友だち」(60.5%)と続く。「塾の先生」(41.2%)もあり、潤沢な相談相手をもっている。特に、「学校の先生」の位置が非常に高い点は重要である。

次に、学校の進路指導への評価をみる(図表22)。

図表22 学校の進路指導への評価

		あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	合計
ア. 進学先や就職先について先生に相談しやすい	度数(N)	12	52	92	72	228
	内訳(%)	5.3%	22.8%	40.4%	31.6%	100.0%
イ. 具体的な進学先や就職先を決める際にはアドバイスをあまりせずに生徒自身の考えに任せている	度数(N)	13	71	109	35	228
	内訳(%)	5.7%	31.1%	47.8%	15.4%	100.0%
ウ. すべての生徒を卒業までに進路決定させる	度数(N)	2	27	102	97	228
	内訳(%)	0.9%	11.8%	44.7%	42.5%	100.0%
エ. 進学や就職をする/しないは生徒に任せている	度数(N)	8	36	90	94	228
	内訳(%)	3.5%	15.8%	39.5%	41.2%	100.0%
オ. 進路に関するイベントや配布物が充実している	度数(N)	1	11	52	164	228
	内訳(%)	0.4%	4.8%	22.8%	71.9%	100.0%

「あてはまる」に注目して支持の高い順に上げる。「オ. 進路に関するイベントや配布物が充実している」(71.9%)の支持は非常に高い。「ウ. すべての生徒を卒業までに進路決定させる」(42.5%)と「エ. 進学や就職をする/しないは生徒に任せている」(41.2%)で拮抗している。生徒に情報を与え、その結果として生徒が自主的な判断をしていることがうかがえる。

さらに、進路選択や職業選択で感じたこと・考えたことへの評価をまとめたのが図表23である。

図表23 進路選択や職業選択で感じたこと・考えたこと

		まったくそう思わない	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思う	強くそう思う	合計
ア. 自分がどんな仕事に向いているのかわからない	度数(N)	23	88	81	36	228
	内訳(%)	10.1%	38.6%	35.5%	15.8%	100.0%
イ. 進路について相談する相手がいらない	度数(N)	113	94	15	6	228
	内訳(%)	49.6%	41.2%	6.6%	2.6%	100.0%
ウ. やりたいものがみつからない	度数(N)	94	79	32	23	228
	内訳(%)	41.2%	34.6%	14.0%	10.1%	100.0%
エ. やりたいものが沢山あって選べない	度数(N)	64	87	51	26	228
	内訳(%)	28.1%	38.2%	22.4%	11.4%	100.0%
オ. 進路について先生と意見が合わない	度数(N)	90	101	29	8	228
	内訳(%)	39.5%	44.3%	12.7%	3.5%	100.0%
カ. 進路について得られる情報が少ない	度数(N)	78	98	42	10	228
	内訳(%)	34.2%	43.0%	18.4%	4.4%	100.0%
キ. 意思決定をする時期が早すぎる	度数(N)	83	90	40	15	228
	内訳(%)	36.4%	39.5%	17.5%	6.6%	100.0%
ク. 一旦進路を決めてはみたが自信が持てない	度数(N)	52	55	80	41	228
	内訳(%)	22.8%	24.1%	35.1%	18.0%	100.0%
ケ. 自分の選んだ進路に将来性があるかわからない	度数(N)	81	64	54	29	228
	内訳(%)	35.5%	28.1%	23.7%	12.7%	100.0%

この質問では、あえて否定的な項目を上げてある。四択の質問ではあるが、大きな傾向をみるために支持と不支持の二択に分けて考え、支持が多いものを上げてみる。

「ク. 一旦進路を決めてはみたが自信が持てない」(53.1%)、「ア. 自分がどんな仕事に向いているのかわからない」(51.3%)、「ケ. 自分の選んだ進路に将来性があるかわからない」(36.4%)、「ウ. やりたいことがみつからない」(24.1%)となる。

すなわち、一般的に高校の進路指導で問題となる「ウ. やりたいことがみつからない」は少なく、それが「ア. 自分がどんな仕事に向いているのかわからない」という自分の意志

の問題ではなく、適性の問題としてより大きく取り上げられていることと、やりたいことが見つまっていることを前提にして、「ク. 一旦進路を決めてはみたが自信が持てない」と「ケ. 自分選んだ進路に将来性があるかわからない」が問題となっているのである。職業を考えるとこの段階の、言わば次の段階における悩みがクローズアップされているのである。

学校選択において重視する要因との関係をここでは「職業考慮因子」に限らず検討してみたい（図表24）。

図表24 学校選択の因子得点と進路選択・職業選択で感じたこと・考えたことの相関

		自分がどんな仕事に向いているのかわからない	進路について相談する相手がいない	やりたいものがみつからない	やりたいものが沢山あって選べない	進路について先生や親と意見が合わない	進路について得られる情報が少ない	意志決定をする時期が早すぎる	一旦進路を決めてはみたが自信が持てない	自分の選んだ進路に将来性があるかわからない
無難因子	Pearsonの相関係数	<b>0.26</b>	0.19	<b>0.34</b>	0.05	0.12	0.07	0.19	<b>0.28</b>	0.21
	有意確率(両側)	0.000	0.005	0.000	0.491	0.088	0.303	0.005	0.000	0.001
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	217	217	217
経済的負担考慮因子	Pearsonの相関係数	0.14	0.05	0.13	0.21	0.17	0.04	0.04	0.20	0.12
	有意確率(両側)	0.038	0.460	0.047	0.002	0.010	0.557	0.541	0.003	0.072
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	217	217	217
職業考慮因子	Pearsonの相関係数	-0.10	<b>-0.24</b>	-0.12	-0.02	-0.10	-0.17	-0.04	0.02	-0.18
	有意確率(両側)	0.142	0.000	0.083	0.742	0.128	0.014	0.542	0.754	0.006
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	217	217	217
学校魅力因子	Pearsonの相関係数	-0.11	-0.07	-0.23	0.10	-0.13	0.01	-0.05	0.01	-0.07
	有意確率(両側)	0.111	0.303	0.001	0.146	0.063	0.858	0.468	0.841	0.334
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	217	217	217
受験考慮因子	Pearsonの相関係数	0.18	-0.11	0.15	-0.03	-0.07	-0.21	0.02	0.09	-0.03
	有意確率(両側)	0.008	0.104	0.024	0.662	0.324	0.002	0.789	0.203	0.704
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	217	217	217
評判考慮因子	Pearsonの相関係数	0.11	-0.01	0.06	0.17	0.05	-0.03	0.01	0.11	0.07
	有意確率(両側)	0.108	0.891	0.401	0.013	0.431	0.640	0.872	0.106	0.298
	度数(N)	217	217	217	217	217	217	217	217	217

非常に強い相関があるものについて太字にしてある。因子毎にみてゆく。「無難因子」は、「やりたいものがみつからない」を筆頭に、「一旦進路を決めてはみたが自信が持てない」や「自分がどんな仕事に向いているのかわからない」と強く結びついていることがわかる。他の因子もそれぞれの困難と結びついているのだが、非常に強いものだけに限定すると「職業考慮因子」は、「進路について相談する相手がいない」と負の相関が、すなわち相談相手を持っていることと強く関係している。逆の言い方をすると、将来の職業を考えることが、相談相手を必要としているといってもいいかもしれない。

### (5) 小括

ここまでみてきたように生徒は、「専門職」への就職希望を大学選択と学習へのモチベーションのためのアンカーとし、「現在充足志向」と抗いながら勉強している。生徒の学校選択は、職業考慮と経済的負担の考慮が大きな影響を与えていた。職業への考慮は、しかし大学選択のアンカーとしての役割を良く果たしているものの、生徒の職業生活を含めた将来にまで貫くものではなく、やはり現代青年らしく、「自分らしさ」を重視し、生活の安定を望んでいた。「専門職」は、それを可能にするものでもあると理解していた。

## 2. 学校生活

ここでは学校生活について検討する。その際、様々な局面やその評価について注目するのではなく、学校生活における重点との関係で分析してゆく。特に、学校生活における重点を聞いた項目から、生徒ひとりひとりの学校生活の型を考えてみたい。

### (1) 学校生活の類型とその特徴

まず、学校生活における重点において異なる生徒を幾つかの類型に区分したい。「勉強」と「課外活動（部活等や習い事）」（以下、簡単に「課外活動」と省略する）、「友人関係」、「趣味」への注力の全体が10割になるように生徒に書き込んでもらった設問を利用して学校生活の類型を作った（それぞれの注力割合のパターン分類は、文末の資料1を参照していただきたい）。

結果的に四つの類型を設定した。質問票を作成した時点では、この「勉強」と「課外活動（部活等や習い事）」、「友人関係」、「趣味」のそれぞれが、高校時代の生活の注力配分上、大きなものと考えていた。しかし分析をするに従って、友人関係の他の三領域とは異なる性格に気付くこととなった。例えば、学校以外での勉強の頻度を聞いた設問（「家で週に何日勉強するか」とその注力との相関を作成してみると、「勉強の注力」と「勉強の頻度」は強い正の相関があった。そして「課外活動」と「趣味」の注力と「勉強の頻度」は、強い負の相関があった。すなわち、三つの領域の注力は勉強の頻度に影響を与えるという意味で、生活時間の在り方の違いを含んだ、まさに注力であった。しかし友人関係への注力は勉強の頻度とは全く相関がない。このような意味で「友人関係」は、精神的な意味での注力（気遣い等）ではあっても、生活時間の違いにはつながらない。

以上のことから、パターン分類において、「勉強」を軸に、「課外活動」と「趣味」の注力のバランスを問題とした。そのため「友人関係」は、補助的な使用にとどまった。

「第Ⅰ類型（勉強中心）」は文字通り、勉強を中心とした高校生活を送っている。そして「第Ⅱ類型（両立）」は、「勉強」にもうひとつのものを加えたものとの、両立である。この「第Ⅱ類型（両立）」に、下位類型として「勉強+課外活動」を「課外活動中心」、「勉強+趣味」を「趣味中心」を作った。「第Ⅲ類型（バランス）」は、「勉強」と「課外活動」これにさらに「趣味」も加え、しかも同程度に注力する高校生活を送っている。最後に「第Ⅳ類型（勉強以外）」は、「勉強」への注力が少ないものである。さらに下位類型として、「課外活動中心」、「趣味中心」、「バランス」（「課外活動」と「趣味」に同程度の注力を行っている場合）、「友人中心」の四つに区分した。

以下の分析では、四つの大分類と八つの小分類を使用して分析を進めたい。主に大分類を使用する。大分類をまとめたのが図表25である。

図表25 学校生活類型

	度数(N)	内訳(%)
第Ⅰ類型(勉強中心)	97	42.5
第Ⅱ類型(両立)	46	20.2
第Ⅲ類型(バランス)	21	9.2
第Ⅳ類型(勉強以外)	61	26.8
N.A.	3	1.3
合計	228	100.0

「第Ⅰ類型(勉強中心)」が97名(42.5%)、「第Ⅱ類型(両立)」が46名、「第Ⅲ類型(バランス)」が21名(9.2%)、「第Ⅳ類型(勉強以外)」が61名(26.3%)となった。数字が書き込まれていなかったものは分類から除外した。

この類型の基本的な特徴について確認しておく(図表26・27)。

図表26 学校生活類型と性別のクロス表

		性別		合計
		男性	女性	
第Ⅰ類型 (勉強中心)	度数(N)	49	48	97
	内訳(%)	50.5	49.5	100.0
	調整済み残差	0.13	-0.13	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	21	25	46
	内訳(%)	45.7	54.3	100.0
	調整済み残差	-0.66	0.66	
第Ⅲ類型 (バランス)	度数(N)	11	10	21
	内訳(%)	52.4	47.6	100.0
	調整済み残差	0.23	-0.23	
第Ⅳ類型 (勉強以外)	度数(N)	31	29	60
	内訳(%)	51.7	48.3	100.0
	調整済み残差	0.30	-0.30	
合計	度数(N)	112	112	224
	内訳(%)	50.0	50.0	100.0

$\chi^2=0.472, df=3, p<0.926$

図表27 新学校生活類型と文理系のクロス表

		系		合計
		文系	理系	
第Ⅰ類型 (勉強中心)	度数(N)	40	57	97
	内訳(%)	41.2	58.8	100.0
	調整済み残差	1.20	-1.20	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	14	29	43
	内訳(%)	32.6	67.4	100.0
	調整済み残差	-0.65	0.65	
第Ⅲ類型 (バランス)	度数(N)	9	12	21
	内訳(%)	42.9	57.1	100.0
	調整済み残差	0.60	-0.60	
第Ⅳ類型 (勉強以外)	度数(N)	17	39	56
	内訳(%)	30.4	69.6	100.0
	調整済み残差	-1.17	1.17	
合計	度数(N)	80	137	217
	内訳(%)	36.9	63.1	100.0

$\chi^2=2.48, df=3, p<0.479$

男女差はない。そして文系・理系の差についても同様である。

そして進学先においても、多少の違いはあるが全体としては少ない(図表28)。

図表28 学校生活類型と進学先のクロス表

		進学先							合計
		四年制 国公立 大学	四年制 私立大 学	六年生 国公立 大学	六年生 私立大 学	専門・ 各種学 校	未定	その他	
第Ⅰ類型 (勉強中心)	度数(N)	73	13	9	0	2	0	0	97
	内訳(%)	75.3	13.4	9.3	0.0	2.1	0.0	0.0	100.0
	調整済み残差	-0.17	0.43	1.00	-1.80	0.23	-0.89	-0.89	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	35	4	2	2	1	0	1	45
	内訳(%)	77.8	8.9	4.4	4.4	2.2	0.0	2.2	100.0
	調整済み残差	0.35	-0.79	-0.83	1.47	0.22	-0.51	1.97	
第Ⅲ類型 (バランス)	度数(N)	18	2	0	1	0	0	0	21
	内訳(%)	85.7	9.5	0.0	4.8	0.0	0.0	0.0	100.0
	調整済み残差	1.12	-0.41	-1.35	1.06	-0.66	-0.33	-0.33	
第Ⅳ類型 (勉強以外)	度数(N)	40	8	5	1	1	1	0	56
	内訳(%)	71.4	14.3	8.9	1.8	1.8	1.8	0.0	100.0
	調整済み残差	-0.89	0.52	0.54	-0.03	-0.03	1.71	-0.59	
合計	度数(N)	166	27	16	4	4	1	1	219
	内訳(%)	75.8	12.3	7.3	1.8	1.8	0.5	0.5	100.0

$\chi^2=15.71, df=18, p<0.614$

「第Ⅰ類型(勉強中心)」だからといって、六年制国公立大学進学希望者が顕著に多いわけではない。進学先が決まっていたとしても、具体的な学校に難易度があるからであろう。

しかしながらこの類型は、「授業以外での勉強時間」や「成績(自己評価)」には大きく関わってくる(図表29と30)。

図表29 学校生活類型と授業時間外での勉強時間のクロス表

		授業時間外での勉強時間					合計
		ほとんど毎日 (週6~7回)	週に半分以上 (週4~5回)	週に半分くらい (週2~3回)	週に一日	家ではほとんど勉強しない	
第Ⅰ類型 (勉強中心)	度数(N)	89	4	2	0	2	97
	内訳(%)	91.8	4.1	2.1	0.0	2.1	100.0
	調整済み残差	<b>6.49</b>	-4.03	-2.09	-1.98	-2.87	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	34	7	2	2	2	47
	内訳(%)	72.3	14.9	4.3	4.3	4.3	100.0
	調整済み残差	0.60	-0.06	-0.51	1.06	-1.07	
第Ⅲ類型 (バランス)	度数(N)	9	9	1	0	1	20
	内訳(%)	45.0	45.0	5.0	0.0	5.0	100.0
	調整済み残差	-2.40	<b>3.89</b>	-0.16	-0.71	-0.52	
第Ⅳ類型 (勉強以外)	度数(N)	22	14	8	3	13	60
	内訳(%)	36.7	23.3	13.3	5.0	21.7	100.0
	調整済み残差	-6.27	<b>2.06</b>	<b>2.92</b>	1.70	<b>4.54</b>	
合計	度数(N)	154	34	13	5	18	224
	内訳(%)	68.8	15.2	5.8	2.2	8.0	100.0

$\chi^2=73.53, df=12, p<0.000$

「授業時間外での勉強時間」に、この学校生活類型は大きく関わっていた。「第Ⅰ類型（勉強中心）」は、文字通り勉強中心に学校生活を送っている。「第Ⅱ類型（両立）」は、「第Ⅰ類型（勉強中心）」ほどではないが、7割を超える生徒が毎日学校以外でも勉強している。しかし「第Ⅲ類型（バランス）」ではその割合は半分以下に落ちる。「第Ⅳ類型（勉強以外）」では、三分の一にとどまっている。さらに「家ではほとんど勉強しない」生徒も五分之一を超える。

このように、学校生活類型は、進学先の差という形では表れないが、勉強時間には強く関わっている。逆の言い方をすれば、学校生活と進学先とが関わらない、さらに言えば関わり合いのない形で進学先を考えているということであろう。また、生徒調査時に想定していなかったことであるが、通塾している生徒も多く、これが「授業時間外での勉強時間」に関わっているだろう。

成績との関係でも同様のことが言える。ただし成績は自己評価である。

図表30 学校生活類型と成績(自己評価)のクロス表

		現在の成績					合計
		上の方	中の上	中	中の下	下の方	
第Ⅰ類型 (勉強中心)	度数(N)	15	28	27	13	14	97
	内訳(%)	15.5	28.9	27.8	13.4	14.4	100.0
	調整済み残差	3.02	2.24	0.08	-2.40	-2.07	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	3	10	14	10	9	46
	内訳(%)	6.5	21.7	30.4	21.7	19.6	100.0
	調整済み残差	-0.63	-0.01	0.49	0.16	-0.25	
第Ⅲ類型 (バランス)	度数(N)	1	2	9	6	3	21
	内訳(%)	4.8	9.5	42.9	28.6	14.3	100.0
	調整済み残差	-0.70	-1.43	1.65	0.91	-0.78	
第Ⅳ類型 (勉強以外)	度数(N)	1	9	12	18	21	61
	内訳(%)	1.6	14.8	19.7	29.5	34.4	100.0
	調整済み残差	-2.33	-1.56	-1.61	1.94	3.05	
合計	度数(N)	20	49	62	47	47	225
	内訳(%)	8.9	21.8	27.6	20.9	20.9	100.0

$\chi^2=30.53, df=12, p<0.003$

学校生活類型は家での勉強時間に関わっていた。だから成績の違いにも結果している。

ところで成績としては「中」が最多になっている。「上の方」あるいは「下の方」という自己評価は、「下の方」に厚いものとなっている。

「第Ⅰ類型（勉強中心）」は、やはり「上の方」が多い。「第Ⅱ類型（両立）」は平均的である。「第Ⅲ類型（バランス）」は、「第Ⅱ類型（両立）」より、低い方にシフトしている。「第Ⅳ類型（勉強以外）」は、明らかに「下の方」が多い。

以下では、この学校生活類型を軸に、学校生活の満足や友人関係についてみてゆく。

## （２）学校生活の満足

学校生活の満足を、「授業」、「友だち」、「課外活動（部活や生徒会など）」、「学校行事」、「先生」、「成績」、「進路全般」、「高校生活全般」という八つの側面から聞いた。まず、一般的な特徴についてふれる（図表31）。さらに学校生活類型と関係があったもの限定して取り上げて検討する。まず、全体的な特徴である。

図表31 高校生活への満足

		全く満足 していない	あまり満足 していない	やや満足 している	とても満 足してい	合計
ア. 授業	度数(N)	20	51	122	35	228
	内訳(%)	8.8%	22.4%	<b>53.5%</b>	15.4%	100.0%
イ. 友だち	度数(N)	2	16	76	134	228
	内訳(%)	0.9%	7.0%	33.3%	<b>58.8%</b>	100.0%
ウ. 課外活動(部 活や生徒会等)	度数(N)	10	28	74	116	228
	内訳(%)	4.4%	12.3%	32.5%	<b>50.9%</b>	100.0%
エ. 学校行事	度数(N)	5	25	82	116	228
	内訳(%)	2.2%	11.0%	36.0%	<b>50.9%</b>	100.0%
オ. 先生	度数(N)	17	51	114	46	228
	内訳(%)	7.5%	22.4%	<b>50.0%</b>	20.2%	100.0%
カ. 成績	度数(N)	59	113	48	8	228
	内訳(%)	25.9%	<b>49.6%</b>	21.1%	3.5%	100.0%
キ. 進路相談	度数(N)	15	52	121	40	228
	内訳(%)	6.6%	22.8%	<b>53.1%</b>	17.5%	100.0%
ク. 高校生活全般	度数(N)	2	38	112	76	228
	内訳(%)	0.9%	16.7%	<b>49.1%</b>	33.3%	100.0%

最も支持の多いところを太字にしてある。「とても満足している」が最多であるのは、「イ. ともだち」、「ウ. 課外活動(部活や生徒会等)」、そして「エ. 学校行事」になる。そして「やや満足している」が最多になるのが、「ア. 授業」、「キ. 進路相談」、「オ. 先生」、「ク. 高校生活全般」である。「あまり満足していない」が多いのが、「カ. 成績」である。この成績だけが、不満が多い項目で、全体的に生徒は学校生活に満足しているものと考えられる。

そして学校生活類型と関係があるのは、このうち「オ. 先生」である。例えば、最も不満の多かった「カ. 成績」については関係がない。その意味で生徒は、「学校生活に相応しい成績が対応している」という理解をしていると考えられる。そしてこのような理解が成り立たっていないのが、「オ. 先生」である（図表32）。

図表32 学校生活類型と高校生活への満足(先生)のクロス表

		先生				合計
		まったく満足していない	あまり満足していない	やや満足	とても満足	
第Ⅰ類型 (勉強中心)	度数(N)	7	13	55	22	97
	内訳(%)	7.2	13.4	56.7	22.7	100.0
	調整済み残差	-0.17	-2.89	1.92	0.72	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	4	13	19	10	46
	内訳(%)	8.7	28.3	41.3	21.7	100.0
	調整済み残差	0.33	1.02	-1.22	0.24	
第Ⅲ類型 (バランス)	度数(N)	0	3	16	2	21
	内訳(%)	0.0	14.3	76.2	9.5	100.0
	調整済み残差	-1.38	-0.96	2.59	-1.30	
第Ⅳ類型 (勉強以外)	度数(N)	6	22	21	12	61
	内訳(%)	9.8	36.1	34.4	19.7	100.0
	調整済み残差	0.79	2.93	-2.73	-0.18	
合計	度数(N)	17	51	111	46	225
	内訳(%)	7.6	22.7	49.3	20.4	100.0

$\chi^2=20.90, df=9, p<0.014$

ここで分かるように、「第Ⅳ類型（勉強以外）」において、「あまり満足していない」が多くなっている。学校生活における注力を「勉強以外へおくこと」が、先生への満足を減らしているということである。

### (3) 小括

ここまでみてきたように、生徒の高校生活は性別や進路とは関わっていない。しかし、勉強時間や成績には強く関わっていた。学校生活は大体において満足していると言えるが、学校生活の中心に勉強がない生徒の場合、先生に対してあまり満足していない。

### 3. 生徒の特徴

以下では、生徒自身について分析してゆく。自己意識、自分自身の将来像という意味で「大人になるために必要なこと」、友人関係を取り扱う。そして、自己意識の在り方が、「大人になるために必要なこと」や友人関係とどのような関わりをもっているかを明らかにする。

#### (1) 自己意識

図表33は、生徒自身のことについて聞いた設問である（四択式）。特徴的な点を確認しておく。太線で示しているものが、最も多くの生徒が支持したものである。

図表33 自己意識

		まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	N.A.	合計
ア. 決まりやルールをきちんと守る方だ	度数(N)	6	42	113	67	0	228
	内訳(%)	2.6%	18.4%	49.6%	29.4%	0.0%	100.0%
イ. ささいなことですぐ落ち込む	度数(N)	18	55	76	79	0	228
	内訳(%)	7.9%	24.1%	33.3%	34.6%	0.0%	100.0%
ウ. 嫌なことがあっても、すぐに忘れる	度数(N)	33	94	54	47	0	228
	内訳(%)	14.5%	41.2%	23.7%	20.6%	0.0%	100.0%
エ. 粘り強く最後まで続ける方だ	度数(N)	8	73	104	43	0	228
	内訳(%)	3.5%	32.0%	45.6%	18.9%	0.0%	100.0%
オ. 自分の外見(顔やスタイル)が気になる	度数(N)	14	52	95	67	0	228
	内訳(%)	6.1%	22.8%	41.7%	29.4%	0.0%	100.0%
カ. 自分には自分らしさがあると思う	度数(N)	10	40	91	87	0	228
	内訳(%)	4.4%	17.5%	39.9%	38.2%	0.0%	100.0%
キ. 性格を変えたい	度数(N)	41	54	83	50	0	228
	内訳(%)	18.0%	23.7%	36.4%	21.9%	0.0%	100.0%
ク. 周りの大人は自分のことを認めてくれる	度数(N)	16	71	112	29	0	228
	内訳(%)	7.0%	31.1%	49.1%	12.7%	0.0%	100.0%
ケ. 話す相手によって、性格が異なる	度数(N)	17	66	90	55	0	228
	内訳(%)	7.5%	28.9%	39.5%	24.1%	0.0%	100.0%
コ. 自分の居場所がないと感じている	度数(N)	60	106	41	20	1	228
	内訳(%)	26.3%	46.5%	18.0%	8.8%	0.4%	100.0%
サ. いつまでも子どものままでいたい	度数(N)	51	74	57	46	0	228
	内訳(%)	22.4%	32.5%	25.0%	20.2%	0.0%	100.0%
シ. 毎日が楽しい	度数(N)	10	46	96	76	0	228
	内訳(%)	4.4%	20.2%	42.1%	33.3%	0.0%	100.0%

高校生の多感な状況がうかがえる内容となっている。例えば、「イ. ささいなことですぐ落ち込む」の支持は高い。「あてはまる」が34.2%となっている。同様なものとしては、「オ. 自分の外見(顔やスタイル)が気になる」、「キ. 性格を変えたい」を上げることができるだろう。他方で、「シ. 毎日が楽しい」の支持も多いことにみられるように、相対的には安心できる状況の中で、「自分らしさ」を感じつつ、学校生活を送っている。

これをまとめて、幾つかの要因(因子)として考察してみよう(図表34)。

図表34 自己意識の因子分析(第二回目)

	因子			
	1充実・充足因子	2立ち直り因子	3コンプレックス因子	4信念因子
シ. 毎日が楽しい	<b>0.83</b>	0.06	0.23	-0.17
コ. 自分の居場所がないと感じている	<b>-0.66</b>	0.13	0.31	0.04
カ. 自分には自分らしさがあると思う	<b>0.45</b>	0.24	0.04	0.13
イ. ささいなことですぐ落ち込む	0.03	<b>-0.68</b>	0.23	0.10
ウ. 嫌なことがあっても、すぐに忘れる	0.07	<b>0.54</b>	0.12	0.06
オ. 自分の外見(顔やスタイル)が気になる	0.05	0.07	<b>0.64</b>	0.05
キ. 性格を変えたい	-0.18	-0.17	<b>0.41</b>	-0.05
サ. いつまでも子どものままでいたい	0.11	-0.02	<b>0.30</b>	-0.20
ア. 決まりやルールをきちんと守る方だ	-0.14	-0.06	-0.10	<b>0.55</b>
ク. 周りの大人は自分のことを認めてくれる	0.40	-0.07	-0.03	<b>0.46</b>
エ. 粘り強く最後まで続ける方だ	-0.04	0.29	0.09	<b>0.36</b>

因子相関行列				
因子	1充実・充足因子	2立ち直り因子	3コンプレックス因子	4信念因子
1	—	<b>0.41</b>	<b>-0.34</b>	0.19
2		—	<b>-0.32</b>	-0.02
3			—	0.15
4				—

因子分析は、図表33のア～シまでの項目を全部投入した第一回目分析から、因子負荷量が0.3未満の項目を除外して第二回目分析を行ったものである。因子は四つあった。

第1因子は「シ. 毎日が楽しい」から「カ. 自分には自分らしさがあると思う」までの3項目からなる。「充実・充足因子」と命名した。「コ. 自分の居場所がないと感じている」は因子負荷量の符号が負である。

第2因子は、「イ. ささいなことですぐ落ち込む」(因子負荷量の符号は負)と「ウ. いやなことがあっても、すぐに忘れる」からなる。「立ち直り因子」と命名した。

第3因子は、「オ. 自分の外見(顔やスタイル)が気になる」から「サ. いつまでも子どものままでいたい」までの3項目からなる。「コンプレックス因子」と命名した。

第4因子は、「ア. 決まりやルールをきちんと守る方だ」から「エ. 粘り強く最後まで続ける方だ」までの3項目からなる。「信念因子」と命名した。

因子相関行列からは、「充実・充足因子」と「立ち直り因子」の非常に強い正の相関と、「コンプレックス因子」との負の相関、さらに「立ち直り因子」と「コンプレックス因子」との負の相関がある。「信念因子」は他の因子とあまり関係がない。

それぞれの生徒ごとに因子別に得点を付けたものを学校生活類型別に平均してみた。これによって学校生活類型と自己意識の関係の概要を把握することができる(図表35)。

図表35 学校生活類型別自己意識の平均得点

	充実・充足因子	立ち直り因子	コンプレックス	信念因子	有効なケースの数
第I類型(勉強中心)	<b>0.075</b>	-0.015	-0.027	0.047	97
第II類型(両立)	<b>-0.089</b>	-0.031	-0.021	<b>0.214</b>	46
第III類型(バランス)	-0.046	<b>0.088</b>	<b>-0.105</b>	<b>-0.199</b>	21
第IV類型(勉強以外)	-0.029	0.020	<b>0.090</b>	<b>-0.186</b>	60

「第I類型(勉強中心)」は、「充実・充足因子」の得点が高いことに特徴がある。同様にしてみても、「第II類型(両立)」は、「信念因子」の得点が非常に高いことに特徴があ

る。信念が「両立」を支える、あるいは逆に信念をもっているからこそ「両立」が可能になるという連関があると思われる。「第Ⅲ類型（バランス）」は、3領域の活動に分散的に注力していた。そのことが関わっていると思われるのだが、「信念因子」の得点がかなり低い。逆に、「立ち直り因子」の得点が高く、「コンプレックス因子」の得点が低い。分散的な注力は、切り換える速さを必要としているのかもしれない。「第Ⅳ類型（勉強以外）」も「信念因子」の得点がかなり低い。また「コンプレックス因子」の得点も高く、不安定さを抱えているのではないかと理解できる。

さらにこれらの自己意識因子が「自立」、あるいは「大人になること」とどのような関係にあるのか、すなわち自己自身にとっての未来を考えてみる。

## (2) 大人になるために必要なこと

まず、自己意識因子と先ほど使用した項目（「いつまでも子どものままでいたい」）がどのような関係にあるのかを確認しておこう（図表36）。

図表36 「いつまでも子どものままでいたい」と自己意識因子の相関

	充実・充足因子	立ち直り因子	コンプレックス因子	信念因子
Pearson の相関係数	-0.04	-0.08	<b>0.30</b>	<b>-0.18</b>
有意確率(両側)	0.553	0.224	0.000	0.006
N	227	227	227	227

この項目は、自己意識の因子分析において「コンプレックス因子」に所属していた。そのこともあって、「コンプレックス因子」と正の相関が強い。そして、「信念因子」と負の相関がある。特徴的なのは、「充実・充足因子」や「立ち直り因子」とは全く相関がないことである。すなわち、「いつまでも子どものままでいたい」と対立する傾向をもつ自己意識の因子は、「信念因子」である。

図表37 「大人になる」ために必要なこと

		必要だと思わない	どちらかといえば必要だと思わない	どちらかといえば必要	必要だと思う	N.A.	合計
ア. 子どもを育てること	度数(N)	7	39	<b>97</b>	85	0	228
	内訳(%)	3.1%	17.1%	<b>42.5%</b>	37.3%	0.0%	100.0%
イ. 自分のことは自分で決めること	度数(N)	0	2	55	<b>171</b>	0	228
	内訳(%)	0.0%	0.9%	24.1%	<b>75.0%</b>	0.0%	100.0%
ウ. 幅広い知識を身につけること	度数(N)	1	10	89	<b>128</b>	0	228
	内訳(%)	0.4%	4.4%	39.0%	<b>56.1%</b>	0.0%	100.0%
エ. できるだけ良い学校を出ていること	度数(N)	55	<b>99</b>	60	14	0	228
	内訳(%)	24.1%	<b>43.4%</b>	26.3%	6.1%	0.0%	100.0%
オ. 社会の一員としての責任を持つこと	度数(N)	2	7	54	<b>165</b>	0	228
	内訳(%)	0.9%	3.1%	23.7%	<b>72.4%</b>	0.0%	100.0%
カ. 誰にでも平等に接すること	度数(N)	4	23	95	<b>106</b>	0	228
	内訳(%)	1.8%	10.1%	41.7%	<b>46.5%</b>	0.0%	100.0%
キ. 経済的に自立すること	度数(N)	0	1	50	<b>177</b>	0	228
	内訳(%)	0.0%	0.4%	21.9%	<b>77.6%</b>	0.0%	100.0%
ク. 人に迷惑をかけず、一人の力で生きること	度数(N)	9	36	85	<b>96</b>	2	228
	内訳(%)	3.9%	15.8%	37.3%	<b>42.1%</b>	0.9%	100.0%
ケ. 自分ができないことがあることを知ること	度数(N)	1	10	78	<b>139</b>	0	228
	内訳(%)	0.4%	4.4%	34.2%	<b>61.0%</b>	0.0%	100.0%
コ. 困ったときには素直に人に頼ること	度数(N)	1	21	83	<b>123</b>	0	228
	内訳(%)	0.4%	9.2%	36.4%	<b>53.9%</b>	0.0%	100.0%

次に、「大人になる」ために必要なことを聞いた設問（四択式）を分析する（図表37）。  
 全体的には、「大人になる」ために必要なこととして、ほとんどの項目が支持されている。  
 特徴をつかむために、相対的に支持の少ないものを確認しておく。

まず「エ. できるだけ良い学校をでていること」への支持は少ない。これは学歴を「大人になる」ために必要だと考えていないことを表している。個人的な属性のひとつとして考えているのかもしれない。これ以外の項目では、「ア. 子どもを育てること」への支持が相対的に少ない。同様なのが「カ. 誰でも平等に接すること」、や「ク. 人に迷惑をかけず、一人の力で生きること」である。

逆に圧倒的に支持されているのが、「キ. 経済的に自立すること」や「イ. 自分のことは自分で決めること」である。どちらかといえば、「自分ひとり」での自立のイメージである。「コ. 困ったときには素直に人に頼ること」が高くないことと符合する。

それでは、この「大人になる」ために必要なことと自己意識はどのような関係にあるのだろうか。相関係数を計算してみた（図表38）。有為な相関がない項目は省略してある。

図表38 自己意識因子と「大人になる条件」のクロス表

		ア. 子どもを育てること	イ. 自分のことは自分で決めること	ウ. 幅広い知識を身につけること	オ. 社会の一員としての責任を持つこと	カ. 誰でも平等に接すること	キ. 経済的に自立すること	ク. 人に迷惑をかけず、一人の力で生きること	ケ. 自分ができること
充実・充足因子	Pearson の相関係数	0.20	0.14	0.11	0.18	-0.02	0.13	-0.03	-0.02
	有意確率 (両側)	0.003	0.033	0.099	0.006	0.813	0.058	0.624	0.801
	N	227	227	227	227	227	227	225	227
立ち直り因子	Pearson の相関係数	0.04	0.06	-0.04	-0.05	-0.10	0.06	0.03	-0.06
	有意確率 (両側)	0.566	0.386	0.506	0.455	0.138	0.351	0.607	0.331
	N	227	227	227	227	227	227	225	227
コンプレックス因子	Pearson の相関係数	0.08	-0.05	0.00	0.13	<b>0.24</b>	0.09	0.17	0.13
	有意確率 (両側)	0.205	0.492	0.987	0.056	0.000	0.183	0.013	0.044
	N	227	227	227	227	227	227	225	227
信念因子	Pearson の相関係数	0.09	0.17	0.14	<b>0.23</b>	0.18	0.13	-0.02	0.15
	有意確率 (両側)	0.176	0.009	0.040	0.000	0.007	0.043	0.749	0.027
	N	227	227	227	227	227	227	225	227

「いつまでも子どものままでいたい」と自己意識の相関分析において確認したように、やはり「信念因子」が大人になるモチベーションを高める形でかかわる因子であることが確認できる。なんといっても「オ. 社会の一員としての責任感を持つこと」との正の相関が強い点が重要である。この項目には、あまり強くないが「充実・充足因子」も正の相関がある。他の点で興味深いのは、「コンプレックス因子」が「カ. 誰でも平等に接すること」と正の相関が強い点である。

### (3) 友人関係

学校生活のなかで、友人関係は大きな比重を占めていた。学校生活類型を作成するために用いた学校生活への注力を友人関係だけ取り出したものが図表39である。

図表39 学校生活における友人関係の位置(注力量)

割合	度数(N)	内訳(%)
0	9	3.9
1	56	24.6
1.5	1	0.4
2	77	33.8
2.5	1	0.4
3	68	29.8
4	9	3.9
5	3	1.3
8	1	0.4
N.A.	3	1.3
合計	228	100.0

友人関係への注力の性格については、先に言及しておいた。この割合は、精神面での重要性を表しているというものである。友人関係は、生徒にとって学校生活の平均 2.12 割の重要度を占めている。これはかなり大きな比重であろう。「課外活動」の平均 (1.85 割) や「趣味」の平均 (1.86 割) よりも高い。

ところでこの大きな友人関係の制御のためのツールが携帯電話であることは、様々な研究によって明らかにされている。湖陵高校の生徒の場合はどうだろうか。携帯電話は、生徒の 96.5% が所持していた。使用法はメールが主で、通話が約半数を占めていた。

1 日のメール数を学校生活類型別にみたのが図表 40 である。

図表40 学校生活類型別一日のメールの送受信件数

		メールの送受信件数						合計
		1~10 件	11~ 20件	21~ 30件	31~ 50件	51~ 100件	101件 以上	
第Ⅰ類 型(勉強 中心)	度数(N)	58	14	10	5	3	0	90
	内訳(%)	64.4	15.6	11.1	5.6	3.3	0.0	100.0
	調整済み残差	0.50	-0.66	1.25	-0.68	-0.24	-1.20	
第Ⅱ類 型(両 立)	度数(N)	30	7	4	3	2	0	46
	内訳(%)	65.2	15.2	8.7	6.5	4.3	0.0	100.0
	調整済み残差	0.43	-0.48	0.10	-0.13	0.26	-0.74	
第Ⅲ類 型(バラ ンス)	度数(N)	13	4	2	1	0	0	20
	内訳(%)	65.0	20.0	10.0	5.0	0.0	0.0	100.0
	調整済み残差	0.24	0.30	0.28	-0.36	-0.92	-0.45	
第Ⅳ類 型(勉強以 外中心)	度数(N)	34	13	2	6	3	2	60
	内訳(%)	56.7	21.7	3.3	10.0	5.0	3.3	100.0
	調整済み残差	-1.10	0.98	-1.65	1.10	0.63	2.29	
合計	度数(N)	135	38	18	15	8	2	216
	内訳(%)	62.5	17.6	8.3	6.9	3.7	0.9	100.0

$\chi^2=11.63, df=15, p<0.707$

メールの送受信数は、100 件を超える生徒も非常に少数いるが、1~10 件が最も多い。高校生の平均的な姿からみて、かなり少ない部類に入る。友人関係を携帯電話で制御する必要性が少ない可能性がある。また、学校生活類型別にみても、差がない点に特徴がある。「第Ⅳ類型 (勉強以外)」が少し多いところだろうか。

それでは、友人関係はどのような特徴をもっているのだろうか。まず人数という点からみてみよう (図表 41)。それぞれの類型の中で最も多い度数の所を太線にしてある。

図表41 学校生活類型と友人数のクロス表

		友人数									合計
		特に いない	2~3 人	4~5 人	6~9 人	10~ 19人	20~ 29人	30~ 49人	50~ 99人	100人 以上	
第Ⅰ類型 (勉強中 心)	度数(N)	1	5	8	5	16	17	17	19	8	96
	内訳(%)	1.0	5.2	8.3	5.2	16.7	17.7	17.7	19.8	8.3	100.0
	調整済み残差	-1.06	1.12	-0.31	-2.05	-1.57	0.86	1.22	1.09	0.57	
第Ⅱ類型 (両立)	度数(N)	0	1	3	6	8	9	9	8	2	46
	内訳(%)	0.0	2.2	6.5	13.0	17.4	19.6	19.6	17.4	4.3	100.0
	調整済み残差	-1.16	-0.58	-0.66	0.80	-0.78	0.90	1.12	0.15	-0.84	
第Ⅲ類型 (バラ ンス)	度数(N)	0	1	1	3	10	1	1	2	1	20
	内訳(%)	0.0	5.0	5.0	15.0	50.0	5.0	5.0	10.0	5.0	100.0
	調整済み残差	-0.71	0.35	-0.66	0.80	3.23	-1.34	-1.26	-0.84	-0.40	
第Ⅳ類型 (勉強以 外中心)	度数(N)	4	1	8	8	14	7	5	8	5	60
	内訳(%)	6.7	1.7	13.3	13.3	23.3	11.7	8.3	13.3	8.3	100.0
	調整済み残差	2.70	-0.94	1.37	1.04	0.38	-0.92	-1.57	-0.81	0.39	
合計	度数(N)	5	8	20	22	48	34	32	37	16	222
	内訳(%)	2.3	3.6	9.0	9.9	21.6	15.3	14.4	16.7	7.2	100.0

$\chi^2=33.37, df=24, p<0.097$

学校生活類型から推測されることと、意外なことに異なっていることがわかる。「第Ⅰ類型（勉強中心）」が、最も友人数が多いところに山がある形となっている。「第Ⅱ類型（両立）」は中間であり、「第Ⅲ類型（バランス）」と「第Ⅳ類型（勉強以外）」が最も少ないところに山がある。そして、「特にいない」が「第Ⅳ類型（勉強以外）」に集中していることがわかる。

友人関係の質的な側面をみてみよう（四択式。図表42）。最も支持が集中しているところを太字にしてある。

図表42 友人関係

		そうで はない	あまり そうで はない	ややそ うだ	そうだ	N.A.	合計
ア. 友達との関係は、割とあっさり としている	度数(N)	7	44	101	76	0	228
	内訳(%)	3.1%	19.3%	44.3%	33.3%	0.0%	100.0%
イ. 友達には自分の欠点や悩みを 気づかれないようにしている	度数(N)	34	78	78	38	0	228
	内訳(%)	14.9%	34.2%	34.2%	16.7%	0.0%	100.0%
ウ. 同じクラスの人が困っている ときには、力になってやりたい	度数(N)	7	43	108	70	0	228
	内訳(%)	3.1%	18.9%	47.4%	30.7%	0.0%	100.0%
エ. 場面に応じて、付き合う友達 は異なる	度数(N)	12	48	84	83	1	228
	内訳(%)	5.3%	21.1%	36.8%	36.4%	0.4%	100.0%
オ. 友達には、深い悩みを相談す ることが多い	度数(N)	55	92	54	27	0	228
	内訳(%)	24.1%	40.4%	23.7%	11.8%	0.0%	100.0%
カ. 友達と一緒にいるときには同 じことをしていることが多い	度数(N)	11	48	124	45	0	228
	内訳(%)	4.8%	21.1%	54.4%	19.7%	0.0%	100.0%
キ. 友達といるときは、自分らしく いられる	度数(N)	17	35	109	67	0	228
	内訳(%)	7.5%	15.4%	47.8%	29.4%	0.0%	100.0%
ク. 友達といると、疲れる	度数(N)	86	96	36	10	0	228
	内訳(%)	37.7%	42.1%	15.8%	4.4%	0.0%	100.0%

全体的に支持の多いものを確認しておく。「そうだ」に注目して多い順にあげてゆくと、「エ. 場面に応じて、付き合う友達は異なる」、「ア. 友達との関係は、割とあっさりしている」、「ウ. 同じクラスの人が困っているときには、力になってやりたい」、「キ. 友達といるときは、自分らしくいられる」を上げることができる。友人関係のふたつの異なる方向性が表れている。ひとつは距離感のある関係（エやア）であり、もうひとつは親密な関

係を連想させるものである（ウヤキ）。

「ク. 友達といると、疲れる」、「オ. 友達には、深い悩みを相談することが多い」、「イ. 友達には自分の欠点や悩みを気づかれないようにしている」は少ないと思われる。

自己意識との関係も含めて理解を深めてみる。自己意識因子との相関を計算してみた（図表43）。これも相関のあるものに限定してある。

図表43 自己意識因子と友人関係の相関係数

		ア. 友達との関係は、割とあっさりしている	イ. 自分の欠点や悩みを気づかれないようにしている	ウ. 同じクラスの人が困っているときには、力になってやりたいと相談にのる	エ. 場面に応じて、付き合う友達とは異なる	キ. 友達といるときには自分らしくいられる	ク. 友達といると疲れる
充実・充足因子	Pearsonの相関係数	-0.16	<b>-0.26</b>	0.19	-0.08	<b>0.42</b>	<b>-0.48</b>
	有意確率(両側)	0.015	0.000	0.005	0.235	0.000	0.000
	N	227	227	227	226	227	227
立ち直り因子	Pearsonの相関係数	-0.09	-0.21	0.06	0.02	<b>0.26</b>	<b>-0.28</b>
	有意確率(両側)	0.191	0.001	0.345	0.819	0.000	0.000
	N	227	227	227	226	227	227
コンプレックス因子	Pearsonの相関係数	0.08	<b>0.24</b>	0.06	0.15	-0.14	0.22
	有意確率(両側)	0.250	0.000	0.342	0.027	0.032	0.001
	N	227	227	227	226	227	227
信念因子	Pearsonの相関係数	0.01	0.02	0.20	-0.03	0.09	-0.05
	有意確率(両側)	0.825	0.760	0.003	0.629	0.189	0.459
	N	227	227	227	226	227	227

友人関係に強い影響を与えている、あるいは友人関係から強い影響を与えられている自己意識の因子は、「充実・充足因子」であることがわかる。「ク. 友達といると疲れる」と非常に強い負の相関があること、同時に「イ. 自分の欠点や悩みを気づかれないようにしている」との強い負の相関、「キ. 友達といるときには自分らしくいられる」との非常に強い正の相関がある。すなわち、「充実・充足因子」という自己意識は、親密な友人との関係性と深く関係している。そしてその中で、「充実」と「充足」を感じている。

これと類似した関連をみせるのが、「立ち直り因子」である。因子相関行列において両者の正の相関が強かったことから、友人との親密な関係性のなかに「立ち直り因子」もある。

ちょうど逆に関係になるのが、「コンプレックス因子」である。これは、「イ. 自分の欠点や悩みを気づかれないようにしている」と強い相関がある。コンプレックスを気づかれなくようにするという意味での「殻」が、組み合わせになっているようだ。「ク. 友達といると疲れる」も原因でもあり結果でもあるわけだが、正の相関がある。

これらの三つの自己意識因子が友人関係と関わりが深いのに対して、「信念因子」はそれと異なっている。相関があるのは、「ウ. 同じクラスの人が困っているときには、力になってやりたいと相談にのる」のみである（正の相関）。

#### (4) 小括

以上みてきたように、自己意識は「充実・充足因子」と「立ち直り因子」の組み合わせ、「コンプレックス因子」、そして「信念因子」からできている。これは学校生活類型とも関わっている。

「充実・充足因子」と「立ち直り因子」は、友人関係のなかで育まれ、「コンプレックス因子」は自分を守る「殻」をつくる。他方で「信念因子」は、社会の一員として責任を果たしていくという意味で「大人になること」を引き受けてゆく、その意味で高校生活から決別していく志向性でもある。そして「第Ⅱ類型（両立）」は「信念因子」の因子得点が高かった。ちょうど逆のかたちとなるのが、「第Ⅲ類型（バランス）」と「第Ⅳ類型（勉強以外）」である。

## 4. 生徒は保護者をどうみているか

釧路市における産業衰退の現状については、はじめにでも最低限ふれておいたが、その影響は地域拠点校である湖陵高校にも影響を及ぼしていた。家族構成の詳しい分析は省略するが、特徴的なことだけを一点指摘しておく。進学校であるからといって恵まれた家族構成の生徒ばかりではないことである。生活保護家庭も見受けられるし、片親家庭、その中でも母子家庭は珍しくない。しかしながら、生徒の進路への影響を分析してみると、直接的に影響はしていないことがわかった。また、以降で分析する家族との関係についても特徴は見出せなかった。

### (1) 主に家計を担う家族構成員の職業

主に家計を担う家族構成員の職業は、図表44の通りである。

図表44 主に家計を担う家族構成員の職業

	度数(N)	内訳(%)
技術職	9	3.9
専門職	64	28.1
管理職	52	22.8
事務職	32	14.0
技能職	15	6.6
販売職	6	2.6
サービス職	9	3.9
職人的仕事	4	1.8
運輸	4	1.8
保安	7	3.1
農林漁業	15	6.6
その他	5	2.2
わからない	6	2.6
合計	228	100.0

最も多いのは、専門職である（28.1%）。続いて管理職（22.8%）、事務職（14.0%）となっている。生徒の専門職志向は強かったが、家族的な背景もあることがうかがえる。その他の中には、無職や生活保護もあった。

### (2) 家族との関係

家族との関係を7項目にわたって四択式で聞いたものが図表45である。全体的には、家族関係が親密であるという特徴がうかがえる。

図表45 家族との関係

		まったく そう思わ ない	あまりそ う思わな い	ややそ う 思う	そう 思う	合計
ア. 親子で互いに話をする 機会が多い	度数(N)	7	34	78	<b>109</b>	228
	内訳(%)	3.1%	14.9%	34.2%	<b>47.8%</b>	100.0%
イ. いつもみんな で助け合おうと する	度数(N)	13	62	<b>97</b>	56	228
	内訳(%)	5.7%	27.2%	<b>42.5%</b>	24.6%	100.0%
ウ. 自分のことを大人と して扱ってくれる	度数(N)	19	94	<b>96</b>	19	228
	内訳(%)	8.3%	41.2%	<b>42.1%</b>	8.3%	100.0%
エ. 自分のことは自分で やるように言 われる	度数(N)	4	33	<b>103</b>	88	228
	内訳(%)	1.8%	14.5%	<b>45.2%</b>	38.6%	100.0%
オ. お互いのことには干 渉しない	度数(N)	33	<b>105</b>	66	24	228
	内訳(%)	14.5%	<b>46.1%</b>	28.9%	10.5%	100.0%
カ. 家族のことは尊敬で きる	度数(N)	10	32	<b>112</b>	74	228
	内訳(%)	4.4%	14.0%	<b>49.1%</b>	32.5%	100.0%
キ. 相談に乗って くれる	度数(N)	13	39	<b>92</b>	84	228
	内訳(%)	5.7%	17.1%	<b>40.4%</b>	36.8%	100.0%

例えば、「ア. 親子で互いに話をする機会が多い」は、「そう思う」が47.8%ある。「イ. いつもみんな  
で助け合おうとする」、「カ. 家族のことは尊敬できる」そして「キ. 相談に  
のってくれる」も同趣旨の項目である。しかし他方で、「ウ. 自分のことを大人として扱っ  
てくれる」は半々になる。「オ. お互いのことは干渉しない」は「あまりそう思わない」が  
最多であるものの、少なくない生徒が肯定している。

生徒の学校選択において重視する要因の因子と親との関わりを相関分析したのが図表4  
6である。

図表46 親との関わりと別学校選択において重視する要因(因子)の相関分析

		無難 因子	経済的 負担考 慮因子	職業 考慮 因子	学校 力因 子	受験 考慮 因子	評判 考慮 因子
ア. 親子で互いに 話をする機会が多 い	Pearsonの相関係数	-0.04	-0.03	<b>0.14</b>	<b>0.17</b>	-0.02	0.05
	有意確率(両側)	0.572	0.654	0.034	0.012	0.748	0.425
	N	217	217	217	217	217	217
イ. いつもみんな で助け合おうと する	Pearsonの相関係数	0.02	0.02	<b>0.15</b>	0.04	0.06	<b>0.14</b>
	有意確率(両側)	0.738	0.790	0.026	0.526	0.352	0.044
	N	217	217	217	217	217	217
ウ. 自分のことを 大人として扱っ てくれる	Pearsonの相関係数	-0.01	0.04	0.05	-0.05	0.00	0.08
	有意確率(両側)	0.849	0.533	0.475	0.442	0.981	0.244
	N	217	217	217	217	217	217
エ. 自分のことは 自分でやるよう に言われる	Pearsonの相関係数	0.00	0.04	0.09	0.06	<b>0.17</b>	-0.06
	有意確率(両側)	0.945	0.575	0.194	0.360	0.012	0.414
	N	217	217	217	217	217	217
オ. お互いのこと には干渉しない	Pearsonの相関係数	0.01	-0.07	<b>-0.21</b>	-0.09	-0.02	-0.08
	有意確率(両側)	0.851	0.272	0.002	0.170	0.734	0.271
	N	217	217	217	217	217	217
カ. 家族のことは 尊敬できる	Pearsonの相関係数	0.05	0.01	<b>0.17</b>	0.05	<b>0.18</b>	0.02
	有意確率(両側)	0.454	0.919	0.012	0.434	0.010	0.741
	N	217	217	217	217	217	217
キ. 相談に乗って くれる	Pearsonの相関係数	0.01	0.02	<b>0.16</b>	<b>0.15</b>	<b>0.13</b>	0.06
	有意確率(両側)	0.887	0.804	0.016	0.033	0.050	0.415
	N	217	217	217	217	217	217

まず、親子関係の対話性と学校選択において重視する要因が関わっていることがわかる。「ア. 親子で互いに話をする機会が多い」や「キ. 相談にのってくれる。」は、ともに「職業考慮因子」と関わっている。これに「イ. いつもみんなで助け合おうとする」や「カ. 家族のことは尊敬できる」の良好な家族関係をうかがわせる項目も、同様である。そして逆に、「オ. お互いのことは干渉しない」は「職業考慮因子」と負の高い相関がある。

### (3) 保護者の進路希望

保護者の進路希望（についての生徒の把握）をみたのが図表47である。二択式で聞いた設問である。

特徴は、「2. 国公立大学を望んでいる」ことである（64.0%）と「9. 自分に任せてくれている」（61.8%）が高いことである。そして相対的には、「10. 北海道内での進学／就職を望んでいる」（28.5%）である。

生徒に任せてはいるが、「8. 進路について関心がない」訳ではない（1.3%）。そして国公立を強く希望していることと裏表の関係になるが、「3. 私立大学を望んでいる」が少なく（5.3%）、北海道での進学／就職を希望していることを希望してはいるが、「12. 一度別の地域に行ってもいいが、最終的には釧路圏に戻ることを望んでいる」（4.4%）が少なく、釧路圏に戻ることはありえないと思っている。

このように任せてはいるが、それは生徒自身の考え方が自分の希望をよく知っている（体現している）ので、「任せる」ということですねであることを表している。

図表47 保護者の進路希望

		はい	いいえ	N.A.	合計
1. 親と相談したことがない	度数(N)	3	224	1	228
	内訳(%)	1.3%	98.2%	0.4%	100.0%
2. 国公立大学進学を望んでいる	度数(N)	146	81	1	228
	内訳(%)	64.0%	35.5%	0.4%	100.0%
3. 私立大学進学を望んでいる	度数(N)	12	215	1	228
	内訳(%)	5.3%	94.3%	0.4%	100.0%
4. 専門・各種専修学校進学を望んでいる	度数(N)	1	226	1	228
	内訳(%)	0.4%	99.1%	0.4%	100.0%
5. 就職を望んでいる	度数(N)	3	224	1	228
	内訳(%)	1.3%	98.2%	0.4%	100.0%
6. 家業を継ぐことを望んでいる	度数(N)	2	225	1	228
	内訳(%)	0.9%	98.7%	0.4%	100.0%
7. 特定の進路を望んでいるわけではない	度数(N)	33	194	1	228
	内訳(%)	14.5%	85.1%	0.4%	100.0%
8. 進路について関心がない	度数(N)	3	224	1	228
	内訳(%)	1.3%	98.2%	0.4%	100.0%
9. 自分に任せてくれている	度数(N)	141	86	1	228
	内訳(%)	61.8%	37.7%	0.4%	100.0%
10. 北海道内での進学／就職を望んでいる	度数(N)	65	162	1	228
	内訳(%)	28.5%	71.1%	0.4%	100.0%
11. 釧路圏内での進学／就職を望んでいる	度数(N)	14	213	1	228
	内訳(%)	6.1%	93.4%	0.4%	100.0%
12. 一度別の地域に行ってもいいが、最終的には釧路圏に戻ることを望んでいる	度数(N)	10	217	1	228
	内訳(%)	4.4%	95.2%	0.4%	100.0%
13. わからない	度数(N)	3	224	1	228
	内訳(%)	1.3%	98.2%	0.4%	100.0%
14. その他	度数(N)	4	223	1	228
	内訳(%)	1.8%	97.8%	0.4%	100.0%

## 5. 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(フリーアンサー)の分析からみる高校生の「心のこり」

アンケート調査の最後に、「仮にもう一度高校生活を送り直せるとしたら、あなたはどんなことがしたいですか。」という質問をした。ほとんどの生徒がこれに回答を寄せてくれた。これについて分析する。文脈をもった回答の中から、端的に使用されている「こと」に注目して分類を行った。ここではそれを中心とした分析を行う。回答は、巻末に資料として添付する。

また「心のこり」の方向性を知るために、「第Ⅱ類型(両立)」において勉強と何を両立していたのかを知ることによって、「心のこり」が「両立」への反省としてあるのか、それとも現在の「両立」を肯定した上で、よりどちらかに、あるいは両方にウェイトがおきたいといっているのかが判断できる。そのために、下位類型を使用する。

「第Ⅱ類型(両立)」は、「課外活動中心」と「趣味中心」を区別した。同様に、「第Ⅳ類型(勉強以外)」も、「勉強以外」のどこなのかが問題となる。そのため、「課外活動中心」と「趣味中心」の区別、これに「課外活動」と「趣味」の両方にウェイトを置いた「バランス」と、「友人中心」の区別を行っている。

### (1) 「第Ⅰ類型(勉強中心)」の特徴

「第Ⅰ類型(勉強中心)」の「心のこり」を整理した。図表48である。

図表48 進学先別文理別の高校時代にしておきたかったこと(第Ⅰ類型:勉強中心型、M.A.)

進学希望先	文理		勉強	課外活動	趣味	友人	遊ぶ	その他	なし	計	その他内容(ひとりでも内容が異なれば、掲げてある)
四年制国公立大学	文系	度数(N)	19	9	0	1	2	5	1	29	行事、努力する、本を読む、真面目に物事を考える、やせる
		内訳(%)	65.5%	31.0%	0.0%	3.4%	6.9%	17.2%	3.4%	100.0%	
四年制私立大学	理系	度数(N)	25	5	0	8	1	5	4	40	時間を有効に使う、数学、塾に入る、普通に生活する、留学
		内訳(%)	62.5%	12.5%	0.0%	20.0%	2.5%	12.5%	10.0%	100.0%	
四年制私立大学	文系	度数(N)	4	0	0	2	0	2	1	7	自分をやり直すこと、ダイエット
		内訳(%)	57.1%	0.0%	0.0%	28.6%	0.0%	28.6%	14.3%	100.0%	
四年制私立大学	理系	度数(N)	5	1	0	1	1	1	1	6	アルバイト
		内訳(%)	83.3%	16.7%	0.0%	16.7%	16.7%	16.7%	16.7%	100.0%	
六年制国公立大学	理系	度数(N)	8	4	1	1	1	0	0	9	
		内訳(%)	88.9%	44.4%	11.1%	11.1%	11.1%	0.0%	0.0%	100.0%	
専修・各種学校	文系	度数(N)	1	1	0	0	0	0	0	2	
		内訳(%)	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
計		度数(N)	62	20	1	13	5	13	7	93	
		内訳(%)	66.7%	21.5%	1.1%	14.0%	5.4%	14.0%	7.5%	100.0%	

「第Ⅰ類型(勉強中心)」は、文字通り勉強中心の学校生活を送っているわけだが、「心のこり」は、「勉強」(より勉強すること)にある。全体の三分の二が支持している。そして「課外活動」が2割ほどある。「その他」の内容にしても「勉強」と関係があるものも含まれている。そして「友人関係」を上げるものも、一定程度ある。すなわち、現在の学校生活を「了」とし、それをさらに強めることを考えている。

代表的な事例を上げてみる。

(四年制国公立大学文系進学希望者)

「1年生のときから計画的に、毎日勉強する習慣をつけたい。」

以下の類型の分析は、「第Ⅰ類型（勉強中心）」との違いから考察する。

## (2)「第Ⅱ類型（両立）」の特徴

「第Ⅱ類型（両立）」の「心のこり」を整理した。図表49である。

図表49 進学先別文理別の高校時代にしておきたかったこと(第Ⅱ類型:課外活動中心、趣味中心、M.A.)

進学希望先	文理		勉強	課外活動	趣味	友人(恋人)	遊ぶ	その他	なし	計	その他内容(ひとりでも内容が異なれば、掲げてある)
四年制国公立大学	文系	課外活動中心	度数(N) 3	3	0	1	1	0	1	6	努力する、素直になる、何事にも打ち込む、行事、本を読む、教養、一人暮らし、平和に楽しく生きる
		内訳(%)	50.0%	50.0%	0.0%	16.7%	16.7%	0.0%	16.7%	100.0%	
	理系	趣味中心	度数(N) 1	1	1	1	1	2	1	5	行事、平和に楽しく
		内訳(%)	20.0%	20.0%	20.0%	20.0%	20.0%	40.0%	20.0%	100.0%	
文系	課外活動中心	度数(N) 8	7	0	3	1	2	1	13	行事、後悔しないように生きること	
	内訳(%)	61.5%	53.8%	0.0%	23.1%	7.7%	15.4%	7.7%	100.0%		
理系	趣味中心	度数(N) 5	2	1	2	0	2	0	8	本を読むこと、余計なことを考えないこと	
	内訳(%)	62.5%	25.0%	12.5%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	100.0%		
四年制私立大学	文系	課外活動中心	度数(N) 0	1	0	0	0	1	0	2	しっかりした大人になること
		内訳(%)	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	100.0%	
	理系	趣味中心	度数(N) 0	0	0	0	0	0	1	1	
内訳(%)		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%		
六年制国公立大学	理系	趣味中心	度数(N) 1	0	0	0	0	0	0	1	駄目な自分を変えること
		内訳(%)	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
六年制私立大学	理系	課外活動中心	度数(N) 1	0	0	0	0	0	0	1	
		内訳(%)	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
専修・各種	理系	趣味中心	度数(N) 0	0	0	0	0	2	0	1	バイト、旅
		内訳(%)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	200.0%	0.0%	100.0%	
その他	文系	課外活動中心	度数(N) 1	1	0	0	0	0	1	1	よく寝ること
		内訳(%)	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%	
計			度数(N) 22	17	2	7	5	9	5	42	
			内訳(%)	52.4%	40.5%	4.8%	16.7%	11.9%	21.4%	11.9%	100.0%

「第Ⅱ類型（両立）」は、「勉強」と「課外活動」、あるいは「趣味」に注力する高校生活を送っている。「勉強」への「心のこり」は、「第Ⅰ類型（勉強中心）」には及ばないが、約半数からなる。そして同程度のもので「課外活動」への心残りがある。下位類型の中で「勉強」と「課外活動」を行っていた生徒の半数超が、さらに「課外活動」へ打ち込みたかったと考えていることがわかる。他方で「趣味」への注力の「心のこり」は極めて少ない。「やり足りない感」が少ないとも言えるのだが、「課外活動」との性格の違いもあるように考える。「課外活動」は、高校時代の特定の期間でしか行えない活動である。「趣味」は、個人でも、またこれからも行うことができる。しかし、「課外活動」はそうではない。そのことがあるのではないか。「友人関係」は、「第Ⅰ類型（勉強中心）」と大差ない。「遊ぶこと」や「なし」は少し多くなっている。そして「その他」は、こころなしか生き方に関するものが多いように思う。この類型の自己意識で「信念因子」の因子得点が高かったことと関わっているのかもしれない。

全体として、「両立」してきた高校生活を「了」として、「勉強」と「課外活動」へのさらなる注力ができなかったことを「心のこり」としている。

例えば、次の例を上げることができる。

(四年制国立大学理系進学希望者)

「部活と勉強との両立をしっかりとしたい。」

### (3) 「第Ⅲ類型 (バランス)」の特徴

「第Ⅲ類型 (バランス)」の「心のこり」を整理した。図表50である。

図表50 進学先別文理別の高校時代にしておきたかったこと: 第Ⅲ類型(バランス)、M.A.

進学希望先	文理		勉強	課外活動	趣味	友人(恋人)	遊び	その他	なし	計	その他内容(ひとりでも内容が異なれば、掲げてある)
四年制国立大学	文系	度数(N)	6	2	0	1	1	6	1	8	本を読む×3、アルバイト、オープンキャンパスに行く、やりたいことをやる
		内訳(%)	75.0%	25.0%	0.0%	12.5%	12.5%	75.0%	12.5%	100.0%	
国立大学	理系	度数(N)	5	3	1	1	1	2	2	9	人脈をつくる、コミュニケーション能力を上げる
		内訳(%)	55.6%	33.3%	11.1%	11.1%	11.1%	22.2%	22.2%	100.0%	
四年制私立大学	文系	度数(N)	1	0	0	0	0	0	0	1	自分のやりたいことをやる
		内訳(%)	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
私立大学	理系	度数(N)	1	0	0	0	0	1	0	1	自分のやりたいことをやる
		内訳(%)	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	
計		度数(N)	13	5	1	2	2	9	3	19	
		内訳(%)	68.4%	26.3%	5.3%	10.5%	10.5%	47.4%	15.8%	100.0%	

「第Ⅲ類型 (バランス)」は、「勉強」と「課外活動」、そして「趣味」に分散的な注力を行っていた。それと関係があると思うが、「勉強」への「心のこり」は四つの類型の中では最大になる。「課外活動」と「趣味」では、「課外活動」への「心のこり」の方が格段に多い。そして「その他」が実に多い。内容としては、「本を読みたい」が多い。

全体としては、分散的な注力を反省し、「勉強」にもっと注力すべきであったという考えがあると思われる。そして、「その他」が多いことから、「勉強」、「課外活動」そして「趣味」ではないことをすることが高校時代に重要だったのではないかと考えていることがわかる。このような意味で、「心のこり」というよりは、反省的な意味となっている。

(四年制国立大学文系進学希望者)

「もっとはば広い人脈を作り、様々な趣味を持って自由に高校生活をしたい。もっと勉強するように頑張る。」

#### (4)「第IV類型(勉強以外)」の特徴

「第IV類型(勉強以外)」の「心のこり」を整理した。図表51である。

図表51 進学先別文理別の高校時代にしておきたかったこと:第IV類型(勉強以外)(課外活動中心、趣味中心、バランス、友人中心、M.A.)

進学希望先	文理		勉強	課外活動	趣味	友人(恋人)	遊ぶ	その他	なし	計	その他内容(一人でも内容が異なれば、掲げてある)
四年制国公立大学	文系	課外活動中心	度数(N) 3 内訳(%) 50.0%	3 50.0%	0 0.0%	4 66.7%	0 0.0%	2 33.3%	3 50.0%	7 116.7%	行事、塾に行く
		趣味中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%	家庭学習の習慣を身につける
		バランス	度数(N) 2 内訳(%) 15.4%	1 7.7%	0 0.0%	3 23.1%	0 0.0%	1 7.7%	1 7.7%	3 23.1%	本や新聞を読む
	理系	友人中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	本を読む、余計なことを考えない
		課外活動中心	度数(N) 7 内訳(%) 53.8%	6 46.2%	0 0.0%	4 30.8%	1 7.7%	2 15.4%	0 0.0%	12 92.3%	バカなことをしたい、最後の試合をもう一回やりたい
		趣味中心	度数(N) 5 内訳(%) 55.6%	5 55.6%	0 0.0%	2 22.2%	1 11.1%	4 44.4%	1 11.1%	9 100.0%	もっと考えて行動する、規則正しい生活を送る、毎日学校に行く、進路について真剣に考える
四年制私立大学	文系	バランス	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	1 50.0%	2 100.0%	自分のやりたいことをやる
		課外活動中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	2 100.0%	しっかりした大人になる
		趣味中心	度数(N) 1 内訳(%) 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	
	理系	課外活動中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	
		趣味中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 11.1%	2 22.2%	0 0.0%	2 22.2%	自分らしくふるまいたい、アルバイトをしたい
		バランス	度数(N) 1 内訳(%) 100.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	
六年制国公立大学	理系	課外活動中心	度数(N) 3 内訳(%) 100.0%	1 33.3%	0 0.0%	1 33.3%	1 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	3 100.0%	
		趣味中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%	自分にあつた学部に進みたい
		バランス	度数(N) 1 内訳(%) 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	
六年制私立大学	理系	友人中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%		
専修・各種	理系	友人中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%		
未定	理系	趣味中心	度数(N) 0 内訳(%) 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%		
計			度数(N) 23 内訳(%) 46.0%	21 42.0%	0 0.0%	18 36.0%	6 12.0%	15 30.0%	6 12.0%	50 100.0%	

「第IV類型(勉強以外)」は、「勉強」への「心のこり」は四つの類型中最低になる「課外活動」への「心のこり」とほぼ同程度となる。他方で「趣味」は、全くない。そして「友人関係」の「心のこり」が多い。

全体として、「勉強」以外に注力してきたことへの反省がうかがえる。しかしながら、「課外活動」を高校生活の中心としてきた生徒は、もっともっと「課外活動」に打ち込みたかったと考えている。他方で「友人関係」の「心のこり」は、終わりつつある高校生活の文字通りの「心のこり」であるのだろう。

例えば、次の例を上げることができる。

(四年制国公立大学理系進学希望者)

「友達をもっとつくりたい。部活をもっと頑張りたい。毎日勉強したい。ちゃんと毎日学校に行きた

い。進路についてもっと真剣に考えたい。」

#### (5) 小括

全体として、「勉強」をもっと頑張りたいという考え方が強い。そして「課外活動」へ打ち込みたかったという気持ちも強い。他方で、趣味には多くの時間を割いている生徒もいるのであるが、いつでも（高校を卒業しても）、誰とでも、どこでも、「できる」ということがわかっているのか「心のこり」が少ない。そして「友人関係」の「心のこり」は、一部の類型が多い。

## まとめ

以上のように、進路意識、学校生活、生徒の特徴、保護者、「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」（フリーアンサー）の分析を行ってきた。

湖陵高校の進路指導は、地方進学校が創意工夫したものである。生徒を3年間の高校生活でのばす教科指導と一体になった学習モチベーションを喚起するためのものである。

ここまでみてきたように生徒は、「専門職」（技術職も含めて）への就職希望を大学選択と学習へのモチベーションのためのアンカーとし、「現在充足志向」と抗いながら勉強していた。生徒の学校選択は、職業考慮と経済的負担の考慮が大きな影響を与えていた。しかし、職業への考慮は、大学選択のアンカーとしての役割を良く果たしているものの、生徒の職業生活を含めた将来にまで貫くものではなく、やはり現代青年らしく、「自分らしさ」を重視し、生活の安定を望んでいた。「専門職」は、それを可能にするものでもあると理解していた。これには経済的負担も重視している大学選択志向も影響しているだろう。

そして理系進学希望生徒においては、専門職と技術職と結びついた大学での学科選択は、イメージ可能なものであった。文系進学希望生徒においては、難しさもでていた。

生徒の学校生活は、四つの類型を設定することで分析した。生徒の高校生活は性別や進路とは関わっていなかった。しかし、勉強時間や成績には強く関わっていた。このことをどう考えるかで次の推論を行った。少なくとも進路の選択が、それを可能にするための勉強時間や成績を決めているのではない。厳密な言い方とはいえないが、進路を選択したとしても、それを可能とする学校生活を送ることが可能な生徒とそうではない生徒が存在するようだ。このような意味で進路を現実化するのには、希望ではなく、それを可能にする生活を構築することにある。しかし、これは確率的な意味として、である。

そして生徒は、具体的な学校生活の大体において満足していると言えるが、学校生活の中心に勉強がない生徒の場合、先生に対してあまり満足していない。

生徒の自己意識分析からは次のことが示唆された。自己意識の「充実・充足因子」と「立ち直り因子」は、友人関係のなかで育まれる。「コンプレックス因子」は、自分を守る「殻」をつくるようだ。他方で「信念因子」は、社会の一員として責任を果たしていくという意味で「大人になること」を引き受けてゆく、その意味で高校生活から決別していく志向である。そして学校生活の類型で言えば、「第Ⅱ類型（両立）」は「信念因子」の因子得点が高かった。ちょうど逆のかたちとなるのが、「第Ⅲ類型（バランス）」と「第Ⅳ類型（勉強以外）」である。

生徒は全体として、「勉強」をもっと頑張りたかったという気持ち強い。そして「課外活動」を打ち込んでいた生徒は、「課外活動」へももっと打ち込みたかった。他方で、趣味には多くの時間を割いている生徒もいるが、趣味は、「いつでも（高校を卒業しても）」、「誰とでも」、「どこでも」、「できる」ということがわかっているのか「心のこり」が少ない。そして「友人関係」の「心のこり」は、一部の類型で多い。

資料1 学校生活類型のパターン分け(学校生活の注力割合)

第Ⅰ類型(勉強中心型:97名)

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
10	0	0	0	1
9	0	1	0	2
9	0	0	1	1
8	0	1	1	9
8	0	2	0	3
8	0	1.5	0.5	1
7	0	1	2	7
7	0	2	1	9
7	1	1	1	1
7	0	3	0	5
7	1	0	2	1
6	1	3	0	2
6	0	3	1	8
6	1	2	1	4
6	2	2	0	2
6	0	2	2	5
6	2	1	1	4
6	1	1	2	3
6	2	0	2	1
5	2	3	0	2
5	1	3	1	3
5	1	2	2	2
5	0	3	2	5
5	0	4	1	2
5	2	2	1	1
4	2	3	1	5
4	1	3	2	4
4	1	4	1	2
4	0	4	2	1
4	0	5	1	1

第Ⅱ類型(両立型:46名)

<課外活動中心>

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
5	3	2	0	2
5	5	0	0	1
5	3	1	1	1
4	3	2	1	3
4	6	0	0	1
4	4	1	1	1
4	5	1	0	1
3	3	3	1	5
3	5	1	1	2
3	4	2	1	5
3	4	3	0	1
3	5	2	0	1

<趣味中心>

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
6	0	1	3	3
6	1	0	3	1
5	0	2	3	2
5	1	1	3	3
4	0	2	4	2
4	1	1	4	1
4	0	1	5	1
3	1	3	3	5
3	1	2	4	2
3	0	3	4	1
3	0	2	5	1

第Ⅲ類型(バランス型:21名)

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
4	2	2	2	3
4	2	1	3	2
3	3	2	2	5
3	3	1	3	1
3	2	2	3	7
3	4	1	2	1
3	2	1	4	1
3	2	3	2	1

第Ⅳ類型(勉強以外型:61名)

<課外活動中心>

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
2	3	3	2	5
2	3	4	1	1
2	4	3	1	3
2	4	2	2	2
2	7	1	0	1
2	4	4	0	1
2	5	2	1	3
1	8	1	0	2
1	5	3	1	1
1	7	1	1	3
1	4	3	2	4
1	5	2	2	3
1	7	2	0	1
1	6	1	2	1
0	8	2	0	1

<趣味中心>

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
2	1	2	5	2
2	2	3	3	3
2	2	2	4	2
2	1	4	3	1
1	0	2	7	2
1	0	1	8	1
1	0	3	6	1
1	2	1	6	1
1	1	1	7	1
1	3	0	6	1
0	1	3	6	1
0	0	1	9	1

<バランス>

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
2.5	2.5	2.5	2.5	1
2	4	1	5	1
2	4	0	4	1
2	3	2	3	1
1	4	2	3	1
1	3	3	3	2
0	3	3	4	1

<友人中心>

勉強	課外活動	友人関係	趣味	度数(N)
3	1	5	1	2
3	2	4	1	1
0	1	8	1	1

資料2-1 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(第I類型:97名)その1

内容	
文系	1年生からもう1回勉強やりなおしたい
	1年生のうちから勉強したい。
	1年生のときから、もっと勉強したり、遊ぶときは遊びたかった。部活にも、もっと意欲的に取り組めたらよかった。
	1年生のときから計画的に、毎日勉強する習慣をつけたい。
	1年生のときから勉強するクセをつけたい。
	コツコツ努力することを定着させたい。
	ちゃんと勉強し直したい。
	なし
	もう一度一年生からやりなおして学力をあげたい！学祭&体育祭を楽しみたい！！
	もっといろんなことを楽しみたい！！
	もっと何事にも打ちこみたい
	もっと勉強したい。
	もっと勉強していればよかった
	もっと勉強していればよかった。
	もっと本を読みたい。
	違う部活に入って活躍したい。しっかり勉強したい。
	運動系の部活に入って、もっと勉強したい。
	器学部に入って音楽を続けたい。
	真面目に物事を考えた生活をしたい。
	部活で全道に行きたい。
	部活に入りたい。もっと勉強したい。
	部活をがんばり、もっと試合に出てみたい。
	部活をもっともっと頑張りがかった。全道ベスト8達成したかった。やせたかった。体しぼりたかった。
	勉強
	勉強。
	勉強をもっと早い段階から始めたい。
	勉強を真面目にするべきだった
	勉強面も充実した1、2年を過ごしたかった。部活でコンクールに出品して入賞とかしたかった。
	友達を作りたい。1年の時からもっと勉強する。
	1から勉強しなおして、進路のために十分な学力をつけたい。
	1年のときからすこしでも勉強する。
	1年の頃からコツコツやっておくべきだった。部活で全国に行きたかった。もっと社交的になりたかった。
	1年生からもっと勉強すべきでした！！
1年生から死ぬ気で勉強してみたかった。	
1年生ののときから、コツコツ勉強する。部活と勉強をうまく両立	
こつこつ勉強していたい。	
しっかりと勉強し直したい。部活	
ちゃんと勉強し、彼女をつくり大切に作る	
ひたすら勉強したいです。	
もっとたくさんの人と交流を深めたい。	
もっと一生懸命勉強したい。	
もっと初めから、色々な人とはなす	
もっと勉強するべきだった。	
もっと勉強をしたい。	
もっと友達と遊びたい	
高1の頃もっと勉強しときたい。でもしようがないので今頑張る。単純にもう一回高校生活を楽しみたい。	
時間を有効的に使いたい	
自由に学生らしく。ちゃんと勉強したい。	
数学がしたい	
送りなおしてもかわらない	
同じ高校生活を送りたい	
特になし。	
特になし。やりなおしても同じことをするきがする	
入学と同時に塾に入り、もっと楽に志望校に入りたかった。	
普通に生活を送りたい	
部活をする。もっと勉強する。たくさんの人と友達になりたい。	
部活をもっと楽しみたい。	

四年制国公立大学

理系

資料2-1 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(第I類型:97名)その2

		内容
四年制 国公立 大学	理系	勉強したい
		勉強したい
		勉強したい
		勉強したい。
		勉強したい。別の部活に入ってみたい。行事で結果を残したい。
		勉強とギターをがんばりたい。
		勉強を今、後悔のないように頑張りたい。もう一回修学旅行に行きたい。
		勉強を死ぬ程やりたい。
		友達の家になん人でお泊まり！
		友達を多く作りたい。
		留学したい
話したことのないような人と仲良くなりたい。勉強をやりなおしたい。		
四年制 私立 大学	文系	1年生のだからしない自分をやり直したい。
		べんきょー
		もっと勉強していればよかった
		今まだ高校生活は続いているのだから、毎日を満喫するのみ！
		最初からもっと人と明るく接していれば良かった。
	理系	勉強。
		勉強。ダイエット。彼女をつくる
		1年生の時からもっと勉強しておけばよかった。
		アルバイトしてお金をためて、遊んで、勉強も1年のうちからコツコツやりたい！！
		ちゃんと勉強するか、今とは逆の人生を生きたい。
		特にない
六年制 国公立 大学	理系	部活に入りたい。いろんな人と仲良くなりたい。ちゃんと勉強したい
		勉強をちゃんとする
		1年生から勉強し直したい。
		1年生のうちからもっと計画的に勉強する。
		もう少し自分らしくしたい。部活で全国いきたい。もっと勉強したい。
		もっと勉強したい
		もっと勉強しておけばよかったと思います。あと、もっとコンクールやイベントに参加しておきたかったです。(文芸部です)
		もっと本を読みたい、もっと勉強したい、もっと友達と楽しく過ごせる時間がほしい
		もっと本気で部活に取り組んで、早い時期から本気で勉強したい。
		今は引退してしまった部活を、もう一度やりたいです。
		万年帰宅部でいっぱい勉強して、自転車で色んな所に行ったりいっぱい遊びたかった。
専 各	文系	1年生の一学期から、まじめに授業を受けて、まじめに勉強したい。
		部活をもっと一生懸命やる。

資料2-2 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(第Ⅱ類型:45名)

		内容	
第Ⅱ類型 (課外活動中心)	四年制 国立 公立 大学	文系	
		1年の時からもう少し勉強すべきだった。部活にもっと真剣にとりくみたかった。 すなおになりたい。	
		ソフトテニスの全道大会へもう一度出場して、勝ち進みたい。1年の時から真面目に勉強しておきたい。でも、「戻りたい。」とはそんなに思いません。今は今だから。 もう少し計画的に勉強すればよかった	
		もっと友達と一緒にあそびたい。自分の自由な時間がほしい。 部活に力を入れたい。	
		もう1回、修学旅行に行きたい。もっと勉強すればよかったなあ…。	
		もっと部活したい。 もっと勉強したい。	
	理系		
	後悔しないように生活する。勉強を1年生の時から頑張る 甲子園を目指して、頑張りたい。もっと勉強したい。 体力をたくさんつけて、もっとホッケーが上手になりたい 同じ高校生活でいい。 部活と勉強との両立をしっかりとしたい。 部活にもっと打ちこむ。もっと勉強する。1年から今くらい勉強する。友達という時間を増やす。 部活をもっとがんばりたかった。色々な所に行きたい。 勉強にもっと力を入れたい。先輩ともっと交流がしたい。もっと早くから自分のことを周りに話したい。 勉強をたくさんし、部活にもっと打ちこみたい。 友達をたくさんつくって、いろいろ楽しいことをしたい。		
	四私	文系	
	みんなに頼られる、しっかりした人になりたい。 最初から英語を頑張りたい。最初から部活に入りたい。		
	六国	理系	
	1年生の頃から、遊び、勉強をもっと楽しみたい		
	六私	理系	
	部活で全道大会に行きたい。もっと勉強して良い成績をとりたい。		
第Ⅱ類型 (趣味中心)	四年制 国立 公立 大学	文系	
		とくにない。 もっとコツコツ勉強したい。進路をもう少し早い段階から決定したい。趣味のスキルアップや投こう活動をやってみたかった 育った横浜の高校へ進学して、吹奏楽部に入部し、全国を目指したい。 一年生の時の友達作りをやり直す。修学旅行でもう一度京都に行きたい。一年生の時、別のクラスになりたい。 平和に楽しく。	
		理系	
		もっと早く友人をつくり、話し合うべきだった。マジ彼女と別れなければ良かった。 もっと勉強する よけいな事を考えなければ良かった。 運動系の部活に入りたい。 死ぬ気で勉強すればよかった。 勉強をもっと最初からしっかりやりたかった。部活をもっと本気でやれば良かった。 本をもっと読んで知識をつけ小説家になるための力をつけたい。きちんと勉強したい。もう少しみんなと仲よくできたらよかった。 毎日勉強をして学力を上げたいです。	
		四私	文系
		釧路でやり直しても意味がない	
	理系		
	もう一度やり直せるなら、今度はもっと勉強したい。勉強して、諦めた全てを取り戻したい。文系にも行ってみたい。また理系でも良い。何でも良いから、駄目な自分を変えたい。今度は、もっと努力してもっと上の大学へ		
	六国	理系	
	勉強を必死にやる		
	六私	理系	
	たのしい部活を作り上げて、たのしい青春を過ごしたい。		
	専各	理系	
	バイトして、1人でどこかに旅をしてみたい。		
他	文系		
部活をもっとやって技術を磨く。コツコツ勉強する。よく寝る。			

資料2-3 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(第Ⅲ類型:21名)

		内容
バ ラ ン ス 型	四 年 制 国 立 大 学	文系
		こつこつ勉強すること。ジャンルを問わず本を読むこと。アルバイト。オープンキャンパスに行くこと。 もっと勉強したい。→もっと上の大学を目指したい。1年生の時にもう少し遊びたい。
		もっと勉強したい。もっと好きな本を読みたい。
		もっと勉強をしつつ部活も全力でやりたい。
		今と同じでいいです
		図書館の中の本を全部よみたい
		勉強をしっかりやりたい。部活をもっとがんばりたい。
		勉強を毎日する習慣をつける。やりたいことをやる。友人関係ゼロからやり直したい(笑)
	理系	
	なし	
	もっとはば広い人脈を作り、様々な趣味を持って自由に高校生活をしたい。もっと勉強するように頑張る。	
	部活、授業をまじめに受けたい	
	部活で全道大会に行きたい！勉強をもっと頑張りたい！今日みたいな、充実した楽しい毎日になりたい！	
	別に送り直したくない。	
	勉強	
	勉強と部活をもう少しがんばりたかった	
勉強をちゃんとして、コミュニケーション能力をもっと上げたかった。		
友達ともっと遊びたい		
四 私	文	もう少し早くから勉強を始める
理	部活に入らないで、勉強と自分のやりたいことをもっとやりたかった。	

資料2-4 「もう一度高校生活を送り直せるならしたいこと」(第Ⅳ類型:56名)

		内容
勉強以外 (課外活動中心)	四年制 国立 公立 大学	文系
		ない。これまでと全く同じで良い。
		また同じ部活へ入部して、過去の自分よりも努力する。周りの友達をもっと大切にする。修学旅行にもう1回行く 高一から塾に行っておきたかった。部活、学校生活は今のままでいい。 とくにない。
		部活ばかりにならずにクラスの人達をもっと知ろうとすればよかった。勉強を丁寧にしっかりとする。
		部活をもう一度したい。友達をもっと接したい。勉強まじめにしたい。
		友達を作りたい。部活をもっと真面目にやりたい。勉強をやり直したい。
		ちゃんと勉強したい。(また同じことの繰り返しだとは思うけど。)
		もっと馬鹿なことをしたい。
		もっと部活を頑張る。もう少し早く勉強を始める
		もっと勉強の割合を増やしたい。
	理系	
	最後の試合をもう一回やりたい。	
	同じ高校生活で十分楽しかったが、少し勉強しておけば良かった…。	
	部活でもっと良い成績を残したい。友達の輪を広げたい。	
	部活で全道ベスト4、勉強もう少ししとけばよかった。	
	部活と勉強をしっかりと両立したい。自分や周りの人の気持ちを大切にしたい。部活も勉強ももっと頑張りたい。	
	部活にもっとうちこみしたい。友達と遊ぶ時間をつくりたい。	
	本気になって勉強がしたい。部活で全国大会、国体に出たい。	
	本当の自分であられる友達をつくりたい。部活でいい成績を残したい。自分の言いたいことをちゃんと言葉で表現したい。	
	四私	文系
今がたのしいので満足。強いて言うなら、もっと部活がやりたい		
全道で一勝したい。部活以外の他にも自分のやりたいことをやればよかった。		
理系		
部活で全道ベスト8にはいりたい		
六国	理系	
	1年から勉強を継続してやりたい。	
勉強以外 (趣味中心)	四年制 国立 公立 大学	文系
		家庭学習の習慣を身につけたい。
		まじめに勉強。
		もう1度本気で部活をやりたい。1年生の最初の頃から勉強する習慣をつけたかった。
		もっと考えて行動すべき。
		違う部活に入る。規則正しい生活を送る。
	理系	
	過去はもう終わってることだからわからない。	
	部活をもっと一生けんめいにとりこんで楽しみたい。1年生のときから、ある程度勉強したい。友だちや彼女とたくさん遊びたい。	
	部活をもっと真剣にやりたかった。	
	勉強をちゃんとしたい	
	友達をもっとつくりたい。部活をもっと頑張りたい。毎日勉強したい。ちゃんと毎日学校に行きたい。進路についてもっと真剣に考えたい。	
四私	文系	
	勉強をして	
	自分らしくふるまいたい	
理系		
勉強を全くせず、友達と遊んだり、アルバイトをしてもっと楽しく過ごしたい。		
六国	理系	
	自分に合った学部に進みたい。	
未定	理系	
友人と遊ぶ		
勉強以外 (バランス)	四年制 国立 大	文系
		もっと勉強。もっと部活に真剣になる。本とか新聞とかいろいろ読む。
		充分幸せでした。
	理系	
	勉強	
	青春したい。	
理系		
同じことをする		
四私	理系	
	全部やりなおしたい。特に勉強と部活	
六国	理系	
もっと早めに勉強をしとけば良かった。もっと遊んでおけば良かった。		
以外 (友人)	四私	文系
		交友関係を広げたい。本をたくさん読みたい。教養を深めたい。一人暮らしをしたい。彼女を作りたい！！
		理系
運動部に入ってみたい。人みしりしないでどンドン色々な人に話しかければよかった。		
専各	理系	
友達との付き合い方		